

令和六年夏号
(2024年)

第539号

あたらしい道

【日本のあじ】

—
本当の日本人の懐かしい昔を思い出してね、
少し逆戻りしなさらうでございませうか、
こう申します

(『松本草垣女史語録』より)

季刊誌「あたらしい道」

令和六年夏号

〔539号〕

（2024年）

一般財団法人 あたらしい道

日本のあじ

あたりしいむとのもと

これ日本の

もとを言う

松本草垣女史
語録より



目次

—テーマ「日本のあじ」—

ここのは・・・・・・・・・・・・・・・・日本の味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

リバイバル『あさ』・・・・・・・・・・・・・・・・「日本のあじ」・・・・・・・・・・・・・・・・大阪 八木隆明・・・・・・・・・・・・・・・・3

日本の国柄・・・・・・・・・・・・・・・・「万世一系の皇統と日本人の本来性」・・・・・・・・栃木 村里晃男・・・・・・・・・・・・・・・・10

座談会・・・・・・・・・・・・・・・・「国旗掲揚」・・・・・・・・・・・・・・・・宮城 林 篤男・・・・・・・・・・・・・・・・17

「父に代わってお行」・・・・・・・・・・・・・・・・新潟 金内忠男・・・・・・・・・・・・・・・・22

「自分建替え」・・・・・・・・・・・・・・・・大阪 竹田正史・・・・・・・・・・・・・・・・31



寄稿・・・・・・・・・・「憧れるのを止めましょう」・・・・・・・・東京 厚味三樹三郎・・・・・・・・・・36

日本の人柄・・・・・・・・・・「菅原道真」・・・・・・・・・・千葉 橋本正和・・・・・・・・・・45

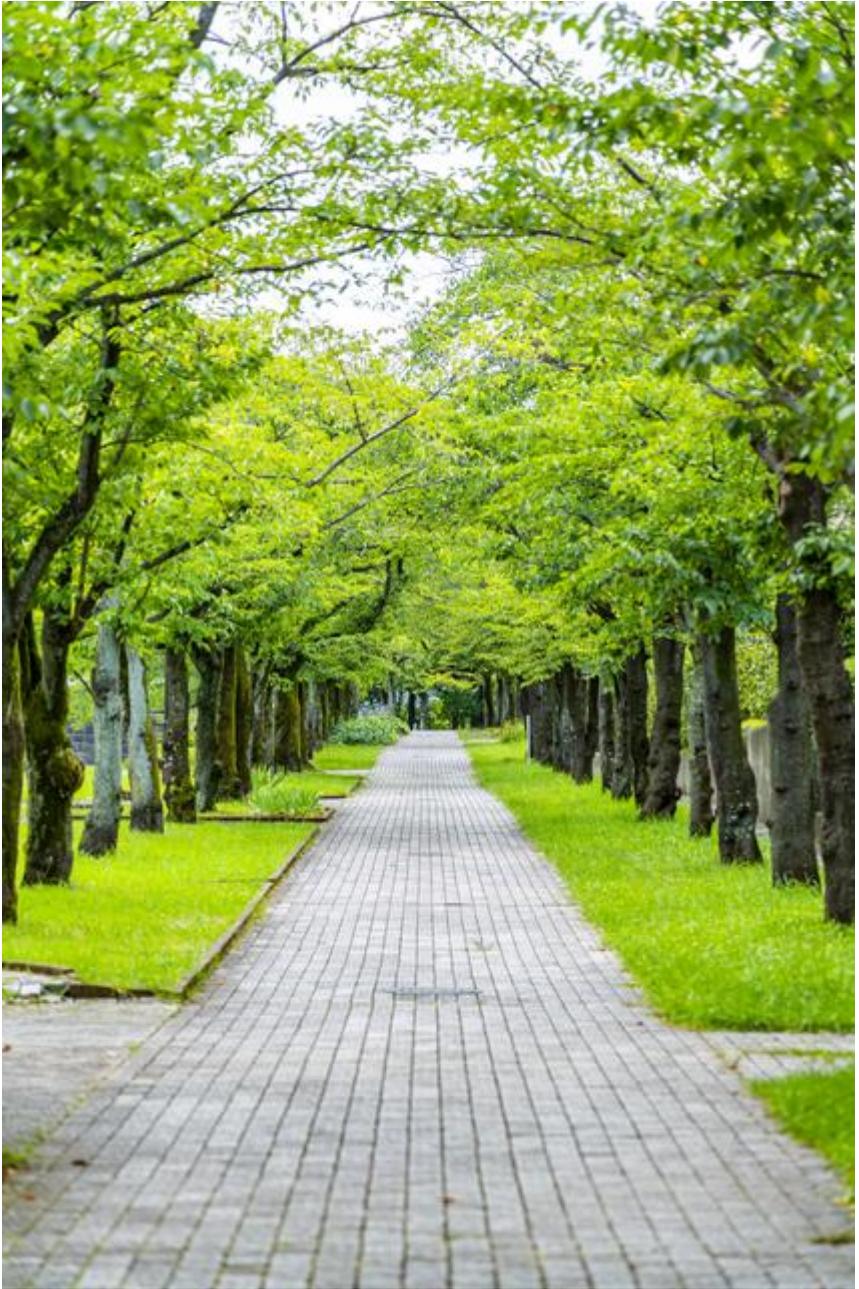
大和撫子・・・・・・・・・・「女性教育のパイオニア 津田梅子」・・・・・・・・神奈川 芹澤和彦・・・・・・・・・・56

連載・・・・・・・・・・「羽曳野物語 (一)」・・・・・・・・・・柳田 節・・・・・・・・・・67

編集後記

【みんなでつくろう、みんなの季刊誌】

(投稿) 原稿用紙一枚 (内容自由)



日本の味

まあ皆さんね、外国の文明は、これはもう本當にきりがありませんわね。ですから、もうあんまり、あれもこれもって欲出しなやって、こう申します。大体お分かりでございましょう。

もうこんなの却ってわずらわしいなあって、いうようなこともあるかも知れませんが、むしろね、少し昔にもどった方がいいってこともある。それほど行き過ぎてしまっていますわね。

ですから、日本人らしさっていうものは段々、なくなってしまうているんですよ。それでね、日本人はね、やっぱりね、例えばまあ、火を起すのも「誠」でしたね。

ちよっとマッチすって、これで何かして（お米の炊き具合に合わせて団

扇で煽いだりして）火を起したりね、それでね、非常に日本人らしかったんですね。

もう今みたいになってしまったら、（電気釜など使ったら）簡単におまんま焼くことが出来るでしょう。本当はそんなもんじゃなかったんですよ。

ですから、もうあんまり外国の色々なものを、これ以上貰うべきじゃない、よした方がいいんですよ。

そして、本当の日本人の懐かしい昔を思い出してね、少し逆戻りしなさいたらどうでございますかって、こう申します。

“それが良かったなあ。やっぱり有難いなあ、我々は本当にこういうこともしたことあったのに、あんまり手を省いちやって、本当に碌でもないんだなあ”ということを、少しは思っほしゅうございますね。

（松本草垣女史語録『煌々』より抄）

昭和四十五年、米国人哲学者カーチス博士が、羽曳野を訪れ、八木隆明氏が出迎えられました。

お行中の「紫の間」に外国人として初めて入室もされた、この西洋の学者に、草垣女史は「あたらしい道」をどのように説明されたでしょうか？

そこに、この道の本質が垣間見えてきます。

日本のあじ

——米人哲学者カーチス博士へのお言葉——

大阪 八木隆明

* 「アソビ」の由来

今は特別の場合に限られていることであるが、以

前は「お式」に帰参すると、おやかたさまの御染筆である「ともし」がいただけた。教務室で複写されて、一人一人に渡されたのである。ただ残念なことには、私達の「理」の受け取り様が杜撰であつたがために、昨今は滅多にお書きにならなくなったことは誠に申し訳ないことである。

しかし、私達の理の立たざるによつて一向に埒のあかない道程を、何かの風の吹き廻しが、ふと人を寄せつけて何となく一歩を進めさせてくれたのではないか。私には今度のことがそのように感じられるのである。

去る昭和四十五年九月十二日のことである。朝食を終えたところへあたらしい道の「場」から電話連絡を受けた私は早速に新大阪駅へ向つた。米人哲学者トナルド・カーチス博士夫妻を駅に出迎えるためである。自宅近くの草っ原のすすきはすでに秋を告げていたが、まだ残暑が厳しくプラットホームで私は汗を拭いてい

た。

午前十一時三十分到着の「ひかり」より降り立ったカーチス博士は六尺を優に越す長身、夫人を伴い案内役の道友瓜谷侑広氏と通訳の東京外語大助教授奈良毅氏ともどものお着きである。同じく出迎えの伊藤誠治氏、磯部輝男両氏の案内でホテル・プラザで昼食をとる。食堂から眺められる石庭風の日本庭園が殊の外お気に召したらしい。カーチス夫妻はよく話を弾ませた。話題は明日閉会式という万国博のことから旅行、スポーツ、文化、宗教と尽きなかったけれども、カーチス博士の日本文化に対する関心には並々ならぬものがあった。わたしたちは「場」に着くまでに今一度「新しい道」とおやかたさまの在り方についての正しい理解を得てもらいたいと思っただけれど、結局不十分な説明しかなし得なかった。瓜谷氏のご紹介であり、カーチス博士の真摯な態度と偏見のなさそうな人柄とを見て、いつしか、おやかたさまがこの「どつくにびと」の来

訪をどのように感じになるかについて私達は楽観的な気分になっていた。

カーチス博士の経歴はなかく、多彩である。学者としては、ノースウエスタン大学で学位を取られ同大学の講師を勤められた。現在はアメリカのテキサス州で教会を主宰する一方、多くの著述、テレビ、ラジオへの出演、大学での講義、各地での講演会と多忙である。やはり、本筋は二十年に及ぶ牧師生活であろうが、従来キリスト教にあきたらず、新しい行き方の教会をつくっておられるようである。ジャーナリズムでの活躍も博士の真面目な使命感がそうさせるのであろう。著名な指導者と成った今もなお求道心に怠りなく、新しい道を模索されるのである。

「場」の苑主室では初対面の挨拶のあと、残暑もいとわず早速に苑主先生との対話が始まった。三時間余り続けられたこの対話は、その内容の次元の高さ、含蓄の深さ、そしてその中に浮き彫りにされた日本とアメ

リカ、彼我の国民性の相違などまことに興味尽きぬものがあるが、ここに書き記す暇のないことを残念に思う。

*女史の困惑

当日は御明断を受ける人があった。対談の途中、車が玄関に着いて、おやかたさまが明断室に入つていかれる足音が聞こえていた。明断が終わると、おやかたさまは私を部屋にお呼びになった。そして、

「わたし、どうしましょうか。八木さん」とおっしゃるのである。＼とつくに＼よりの賓客をいかに遇したらよいかとお尋ねなのである。

「わたし、外人の方の御明断など出来ませんわね。分かるでしょう。じゃ、どうしましょう」

と重ねて聞かれて、虚を突かれた態の私は全くご返事を申し上げることが出来ずにいた。長い沈黙——少なくとも私にはそう思われた——があつて後、おやかたさまは思い切つたようにおっしゃつた。

「それじゃ、私が苑主さんのお部屋へ行つてちょっとだけお会いしましょうか」

明断室は女史として人に会われる公式の場である。

おやかたさまの側からいえば、ゆるがせにすることのできない権威と格がある。しかもなお、松木天村婦人として遠来の客に対して礼を失してはならぬというお思いがある。ここにもおやかたさまの立場と人間性との矛盾があつた。そして結局は御自分でその矛盾を超えてしまわれねばならなかつたのである。

かくして、おやかたさまが外人にお会いになるという特筆すべきことが、実現したのである。カーチス博士の喜びようは大したものであつた。鄭重な挨拶のあと、博士は自分の仕事について自己紹介されて、微力ながら人の心に明かりをとますことに努めている。ついでには今日この場で色々と教えていただいたことを、自分の講演の中に、或いは本の中に紹介させていただいていだろうかと問われた。おやかたさまは、

「あなたはとてもいいお仕事をなさっているのだから、イエス、イエスと言っておきましょう」と答えられた。

そして、私達の方を向かれて、「いい方ね。私ここ（お腹）からそう言っていますわ。私ね、どんな風に思われちゃうかしらと心配でしたけれどね。まあよかったわ。とてもいいお方だね」とおっしゃった。

続けて博士が、毎晩の夜半に及ぶ行事を欠かさずお務めと伺って驚いていると言うと、

「私ね、若い時は病気がちで弱うございましたのに、今、こうして毎晩く声を出せますのよ」と言われたが、博士はさもありませんと深く頷いた。おやかたさまは続けて、「そういう時、私の声は喉から出るんじゃないございませんのよ。ここ（お腹）からなんでもございませからね。お腹からなんですのよ」

これちよつと言つて頂戴、と私の方を向かれた。私の言葉は殆ど英語とも言えなかった。「女史のお声は」と言つておいて、手で喉元を示し、「ここからでなく」

そしてまた手でお腹を押えて「ここからです」

しかし、これが見事に通じたのである。「それでいいく、とお腹の方で言っているわ」とおやかたさまも私の方を向いておっしゃった。

かくして、おやかたさまの「こえ」について認識を深めたカーチス博士は外人として初めて「紫の間」にも参列されることとなった。喜んだ博士は更に膝を乗り出して、おやかたさまに何かを質問されようとした。私は慌ててそれを遮った。「申し訳ありませんが、女史はお忙しいのです。もうお帰りにならなくてはなりません」

カーチス博士は謙虚な人柄である。ああそうか迂闊だったという体で了解して立ち上がり、女史に会い得たことに対して重ねて謝意を述べられた。それを聞いておられたおやかたさまは、

「それじゃね、私ちよつと書きますからね。それを英

語に訳してあなたに届けてもらいましょう」と言われたのである。

夕食が済むと、「松の間」で盛況に行われていた「ねりあい」を見学してカーチス夫妻は感嘆の声をあげた。適当なグループに分かれての熱心な話し合い。全国各地からの道友。このような人間完成を目指すレベルの高い「ねりあい」が毎晩行われているようなところがあるだろうか。きわめて感銘深いと語った。この「場」は指導者を養成するところだということもカーチス博士に強い印象を与えたようである。

九時からの「紫の間」には、一番後方に椅子に腰かけて出席された。御垂示は分かる由もないが、厳粛な雰囲気の中に何かを感じ取られたに相違ない。夜更け、カーチス夫妻と私を乗せて、伊藤誠治さんの運転する車は、国道を京都ホテルに向かった。

翌日、苑主先生よりおやかたさま「御染筆」を見せ

ていただいた。半紙に鮮やかに次のように認められていた。

日本のあじ

あたらしい、もとの、もと、

これ日本の もとを言う、

日本とは、日の理、月の理

月は、ごとおお、日は、さんさん

明日をいたたく、あたらしい、

これが、日本の、ほんとお

ほんとおは、

月と、日とを、ひとつにし、

もと、もと、もともとおおもとの、

「へん」と言うのがありがたい、

昭和四十五年九月十三日

草垣

これを私が翻訳しなければならなかった。「無理だよ」と苑主さんは笑っておられた。「あさ」九号の巻頭言（天村先生執筆）を参考にしたらどうかとの助言をいただいて家に帰った。

その夜を徹して私はこのご染筆を味わった。これはむしろ私達のためにお書き下さった「ともし」ではないのか。そうに相違ない。お式の日にもいただけなくなった「ともし」である。こういう表現が許されるならば、突然の「とづくにびと」の来訪を受けて、おやかたさまの「うち」にある天の日本の国に対する愛情が思わず溢れ出たものである。ここには日本の本当の本来あるべき姿が示されている。素晴らしい。誠に素晴らしい。これなればこそ、今日の私達の修行がやり甲斐があるのである。しかし、私は急がねばならなかった。何とかこの「ともし」の意味するところの、せめて何分の一かでもカーチス博士に伝えたい。夜更けと共に

私は鬱勃たる闘志を感じていた。

また明けやすい初秋の一夜が終わった朝、私は次のような英文を書き上げた紙を手にしていた。まことに我ながら不思議なようなことであった。

この英文の正確な意味は次の通りである。カーチス博士への女史のメッセージ

日本の特質

日本の民族的伝統は理解されるべきものではなくして地になる果実のように味われるべきものである。

新しい道は最も古い日本の伝統を現代に甦らせつつある。

日本の本質には二つの要素がある。その一つは太陽によつて象徴され、いま一つは月によつて象徴される。

太陽は我々に文明をもたらす「活動」を徴わし、月は我々に万物の秩序を教える「言葉」を徴わす。自然は科

学でも宗教でもない。自然は分割されるべきものではない。太陽と月とは常に地球の周りに調和を保っている。今や文明の進歩は自然の秩序を破壊しつつある。しかし我々は「太陽」と「月」との調和を最も古い民族的伝統の中に見出だすことが出来る。

われわれ日本人、特に新しい道につながる人々は、この調和の源泉を魂、とりわけ「大和魂」と呼んでいる。

真理は我々の足許にあり、我々自身の衷にある。まことに真理は望みさえすれば我々の手のとどくところにある。

昭和四十五年九月十三日

〔注〕 本文はカーチス博士のために女史が筆をとられた「ともし」を英訳のために意識したものである。

十四日の夜、この翻訳について苑主先生の御校閲を享け「良し」ということになった。苑主先生より

ただいた白い封筒に御染筆の半紙を大事にたたんで入れ、次に英文のコピーを入れた封をする、表に黒インキで「天人女史御染筆」と書き更に「ドクター ドナルド カーチス」と英語で書き添え、更に別の大きな封筒に入れて、翌十五日私は車を走らせてホテルのフロントに届けた。

更に翌日の夜、ホテルに電話をかけて確かに受け取ってもらえたかとたずねた私の耳に、カーチス博士の幾度も繰り返される謝辞が快く響いてきた。博士の声を聞きながら我知らず手許の紙に次のように書きつけていた。

日の本のここに道ありはらからも

とつくにびとも来りてあゆめ

(おわり)



日本の国柄



万世一系の皇統と日本人の本来性

栃木 村里 晃男

今回は、日本の国柄という題をいただきました。日本という国は、地理的にも地政学的見地から大変特異な性質を持つ国です。

四方が海に囲まれ、アジア大陸から見れば東の果てに位置しています。これ以上東には何もないと中世まで思われていました。まさに日出する国なのです。よって大陸から何がしかの理由で太陽の上る国を目指した人々がいたことも領けます。そして、この島国に来てから地震や台風それに伴う洪水などで危険に晒され、助け合わなければ生きていけない環境の中、育まれた「和の心」が自然発生し

たのです。我々の祖先の叡智です。

古代に思いを馳せてみましょう。

縄文時代は、一万二千年前から紀元前四世紀まで続いていたことが分かっています。

一番古いシュメール文明が約六千年前ですから、その倍以上縄文文明の方が古いことがわかります。これほど長い間、一つの文明が大きな争いもなく続いたということは世界の奇跡と言えます。おやかたさまは、神代の昔、我々の祖先は「みたま」で通じ合っていたと仰います。上皮(註：みたまに対する頭や心のこと)の思いがないのですから争いが起きるはずがありません。この「みたま」がはたらく世界が神代と云われる由縁でしょう。まさに、「みろくの世」です。

この文明が周辺の文明の民の流入を受け入れ同化し、更に弥生人を経て、大和民族になっていったと考えます。その後、大和民族は出雲民族を併合して国をまとめるのですが、出雲民族の文明というのは即ち朝鮮文明ですので大和

民族はその文明を受け入れて国造りを進めるのです。

これが大和朝廷の始まりです。

宮内庁の天皇系図によれば、初代神武天皇が紀元前660年に即位して以来、実に2684年もの長きに亘って連綿と続いてきたありがたい皇統です。また、現在確認できる資料から、六世紀以降、王朝が交代した証拠がない日本の皇室は、少なくとも1500年以上の長い歴史を有しています。この点は、「ギネス世界記録」でも認定されています。

そして、日本の皇室はその長い歴史において、世界で唯一「万世一系」（永久に一つの系統が続くこと）を貫いているのです。

我が国が皇室を中心として連綿と続いてきたわけを更に掘り下げて考えてみましょう。

我が国では、あらゆる外国の文化はすべて我が固有の文化の中に融和せられたのです。海外より輸入した一切の事

物は、皆我が「国体」に適合すべく、同化せられたのです。これが我が国の文化の特筆の一つです。ここにいうところの「国体」即ち言い換えれば、我が国家組織の根本主義の下にすべての文化は融和せられて、独自の発展を遂げたのです。

この文化の発展は、わが国民の努力によって出来たものです。国民が渾一体となつて、その活動が続けてきたからです。その活動の中心、即ち文化発展の中心には、我が皇室がおわれました。学問、芸術、教育、宗教等あらゆる文化事業は、すべて皇室を中心としてその保護奨励の下に発展したことは著しい事実であります。

先ず学問について見ると、歴代天皇のご学問に関する御事蹟は甚だ多く、御歴代の御製の歌集・詩集または御著作の書籍の今日に伝わるもののみを以てするも、おびただしい数になります。御製の歌にあつては、神武天皇を初め奉り、御歴代何れもこれを善くせざるをえず、「万葉集」以来、歌集に収められてあるもののみでも幾方を数えるでしょう

う。

芸術界においては、古より今に至るまですべての時代を通じて、常に皇室の庇護奨励の厚きに依つて、その発展を示して来ました。

古く飛鳥時代にあつては、推古天皇ならびに聖徳太子の力によつて、仏教美術の粹を伝え、天平時代には、聖武天皇を仰いで芸術の振興殊に著しく、東大寺を初め奈良の寺院の仏像の如き、あるいは正倉院御物の如き、その素晴らしさは驚嘆に値するものです。

このように学問・芸術・宗教等文化の各部門にわたつて、皇室が常にその発展の中心にいました。これによつてすべての文化は我が「国体」に融合せられ同化せられたのであります。

国体觀念の発達には三つの段階があります。

日本の国の初めに於いては、皇室を中心として氏族制度を以て国を立てていました。即ち建国の精神は最もよく氏族制度に表れています。国家を以て父子的の一大團結とし

て皇室をその大きな家族の家長と仰いで、皇室を中心に多くの氏族が世襲の職により仕えたのです。しかし、長い年月を経て氏族制度も破綻を生じ、社会組織の維持が困難となり、政治の体制を保つことができなくなりました。ここに聖徳太子が打ち出でて、その改革に努めたのです。氏族制度の弊害を改め、皇室を中心として、国民全体を以て一大團結とし、中央に権力を集中して、国家の統一を図り、国民精神の帰趨を示されたのです。この改革は太子の御在世中には完成せず、中大兄皇子によつてその理想は実現せられ、ここに新日本の建設は成就し、大化の改新は断行せられ、やがて律令政治の組織が立てられました。

これが第一の段階です。この革新は支那から受けた外来思想の影響も大きかったです。かくて氏族制度が潰れてしまい、政治および社会組織に著しい変化が起りました。然しながら、その変化はただ外形に止まって、精神には影響を及ぼさなかつたのです。そして百年ほどの間に、外来思想と従来の氏族制度の調和もできて、日本風の新しい制

度組織ができたのです。氏・かばねという精神(氏姓制度)の中に外国人を採り入れ、支那人でも朝鮮人でも、統べて我が国体の中に同化して、一大家族主義の中に異民族を收容したのです。その間、奈良時代において、朝廷の権力は隆盛を極め、中央集権の実は大いに実り、国家統一の事業は着々と進捗し、国力充実に皇威は宣揚せられました。平安時代に入ると、藤原氏の摂関政治が起り、政権は藤原氏に任せられ、門閥の弊害甚だしく、皇室中心主義は漸く暗雲に覆われるに至りました。

この間、他氏族の反抗がしばしば企てられましたが、平安時代の末に至って、政治の腐敗が極点に達し、遂に政権は公卿から武家に移ったのです。これが第二の段階です。かくて土地経済の権柄、軍事・警察の権は全て幕府の手に歸し、朝廷の権力は衰えたのです。後鳥羽上皇は、その恢復を企て、倒幕の挙に出ました。承久の変です。これは、失敗に終わりましたが政治の形式は変わっても根本主義たる国体の精神は何ら変わる所なく、皇室中心主義は常に

国民の心裡に満ちて広がり、やがて百年後、建武の中興と成って表れたのです。しかし、中興の政治も土地経済の処置が宜しくなく、その為に失敗に歸し、再び武家政治の世となり、室町幕府が出現したのです。これより凡そ二百年の間、戦乱相次ぎ、社会の組織は殆ど崩壊しました。

それでも皇室中心主義は依然として動ずることなく、皇室は常に国民が敬慕する存在であり続けました。やがて織田信長を経て豊臣秀吉に至って、統一の業を成就したのです。

秀吉の政治は摂関政治の形式を採ったのですが、徳川家康が將軍となり再び武家政治の世となったのです。家康は陽に朝廷を尊崇しましたが、陰にはこれを抑えて土地兵馬の実権はすべて幕府に収めました。御歴代天皇を初め、公卿の間では幕府に対して反抗の念が盛んとなり、倒幕の思想はみなぎっていました。やがて文芸復興の機運が高まり、国史国文の研究が盛んになり、皇室中心の思想は燃え上がりました。勤王論が勃興したのです。幕末に至って幕府の

財政窮迫と外交問題の刺激と相まって、幕府は倒壊し、王政復古の大業は成就したのです。明治の初め、五箇条の御誓文によって公論政治の基礎を定められ、次いで立憲政治を始め、議会が開かれることになりました。これが第二段階です。

立憲政治はもとより西洋思想を採り入れたものであるけれども、国体の根本精神は依然として不変でした。このように国体観念の発達に種々の変遷はありましたが、その主義に於いては少しも変わりはない、しかも年を経ると共に益々磨かれてきたのです。

かくのごとく国体観念が発達したのは、一つには対外観念の発達、即ち外国に対する観念の発達というものを考えざるを得ません。対外観念の発達した時は国体観念が発達しているのです。即ち外国の刺激によって国民の自覚が進んだという事実と国体観念の発達は並行しているのです。もう一つの原因は内国の関係です。これは種々錯綜した事情もありますが、例えば氏族と氏族との対抗であるとか、

その時の出来事や事件との関係を以て、国体観念が発達したと考えられます。

この二つの原因の他にもう一つ大きな原因として、御歴代の天皇が聖徳を磨かれるために非常に苦心をなされ、大きな努力をせられたということがあります。即ち日本文化の発達の中心は常に皇室にあつたのです。その発展の中心として御歴代の天皇が聖徳を磨かせられるために、特に御努力遊ばされ御精励なされたことが大きな原因でありました。

もう一つ記すべきは、天皇陛下と国民との親密な近い関係のことです。この君民一体の親しみは実に他の国では見られないものであつて、我が国特有の国体のしからしむるところです。我が国体の精華でしよう。

皇室の御情愛は「父子の如し」と仰せられ、国民もまた皇室を慕うことは今も昔も同じく、二千六百余年一貫している国体の麗しさであります。室町時代、戦乱に明け暮れ、御経済の苦しかった時、兵もなく金もなく、かような時期

にあつても禁裏御所は絶対安全でありました。国民全体が皇室のお守りとなつていたからです。皇室は国民尊崇の中心であつたからです。

このように、我が国では皇室を奉ぜずしては、何事も成就することができないのが当たり前でした。戦国時代にあつて、各地方に群雄が割拠し、覇権を握るための戦に明け暮れている時、最終目的は京へ上り、旗を立て、天子様を奉じて天下に号令することでした。何故か、そうしないと国民が承知しなかつたからです。皇室と国民は古往今来常に親密なる關係を保つて来たからです。

明治大帝は、軍人勅諭を発せられ、軍人は陛下直屬と仰せになり、その親しさをお現しになりました。昔から一貫している国体觀念を表現されたのです。その中で軍人が守るべき徳目として「忠節・礼儀・武勇・信義・質素」の五徳を上げたのです。軍人は政治に関与しないよう明示しています。この精神は、即ち武士道の精神であります。武士道という言葉は、武士という一つの階級の間に発達したと

ころの名ではありませんが、その由来とするところは甚だ古く、既に上古に於いてその淵源を認めることが出来ます。即ち奈良時代に大伴家持が詠んだ歌に「海行かば みづく屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ かえり見はせじ」があります。古くニギノミコトから神武天皇に至るまで大伴氏の祖先は軍隊を率いて、忠誠を尽くしました。「陸に在つても海に在つても、天皇のために仕えてきた」家訓を歌に現したものです。

この武勇忠節の精神は、氏族制度時代に発達したのですが、武家に伝わり鎌倉時代を経て堅実なる国民的精神となりました。

これが所謂武士道であります。

この武士道という精神が、次の時代を通じて国民の間に更に深く植え付けられ、江戸時代には上下の階級にあまねく広まって、平民・町民の間にもその影響を及ぼし。江戸氣質を生んだのです。江戸氣質というものは、一種の武士道そのものです。

武士道とは何かを示してみます。

武士は、理屈ぬきに実際に行く、不言実行。すべてが質素。であるが故に何ごとも簡素。故に物事が直截。ぐずぐず言わず、すぐさま決める。故にまた正直であり、ありのままです。廉潔ともいうべきです。打算的でない。故に信義を尊ぶのです。主従の義を重んずる。故に犠牲的精神に富む。そこでまた名を重んずるのです。武士というものは名こそ重けれ、死しても名を重んずる。故に勇気を尊ぶ。即ち死を軽んずる。武士道の要素はまだありますが大体こんなものでしょう。

この武士道は、江戸時代に至り太平の世になって実質が衰えますが、その精神というものは一般国民の間に広められ国民的精神となりました。そして明治になり、その精神を要約して国民の帰趨を示されたものが五箇条の勅諭であって、これが軍人の精神であると同時に、やがて国民的精神となったのです。

今回のテーマに基づく日本人の本来性とは、この国民的

精神そのものです。即ち国民の自主的精神であり国民自覚の発露であります。これを詮じつめれば即ち国体觀念に外ならず、また皇室中心主義がそれです。

この皇室中心主義は、即ち日本国民精神の中樞であり国民活動の源泉でした。

戦後七十九年目にあたる今、私たちはどう変化したのでしょうか。国民的精神はどうなったのでしょうか。国体觀念は何処に消えたのでしょうか。皇室中心主義は日本人の心から消え去ってしまったのでしょうか。

私たちの直系の父母や祖父母の時代まで連綿と続いてきた国民的精神がこの七十年余りの短い時間の中で消去られてしまいました。

日本人が本来の日本人でないものに変えられてしまったのです。日本人の本来性は何処に行つたのでしょうか。一つの国民の国民性を消し去る、これ程残酷なことを決して許してはいけません。もう一度、先祖伝来、持ち続けて来た日本人の精神性を取り戻しましょう。

座談会

出席者

宮城 林 篤男

新潟 金内忠男

大阪 竹田正史

国旗掲揚

— 国を思うということ —

宮城 林 篤男



① 「この道」縁を
私は平成元年十一月十三日、月例研修にて、この道にご縁がありました。紹介者は従姉妹の林ゆり（千恵子）です。

平成にこの道につながられた、お三方の物語です。この道にどのような縁があってつながられたのでしょうか？
(註…つながる＝道友になること)

親戚ということもあり、毎月、月刊誌を届けてくれたり、近くまで来たからと、機会のある度にあたらしい道の話聞かせてくれました。

「国を思う誠の男千人を仕込む」という言葉に心引かれ、良い話だなと思うと同時に、そのような人になりたいと思うところもあり、興味を持って聞かせてもらっていました。

何年か、そのようなことが続くうちに、



「あたらしい道に繋がったら」と勧められるようになったのです。両親が良い話なら聞かせてもらおうだけで、繋がらなくても良いのでは、と中々許してくれませんでした。そんな状況が続く中、年に3回なら大阪に行けるのでは、と思えるようになり、ようやく承諾してくれたのです。

② 幼い頃の私

私の幼い頃は、国民の祝日には隣近所、どこの家でも玄関に、または店先に日章旗を掲げておりました。

普段、家では、国旗は箱に入れたまま、床の間に大切に保管してありました。父がその箱を取り出して、蓋を開けると、日章旗が綺麗に畳まれて入っていました。

それを掬うようにして掌に載せ、じかに置かないよう、気を配りながら移動するのです。それだけ丁寧に扱う様子を、じっくりと見せてくれました。

また、立てる竹竿を、濡れた布で一度拭き、乾いた布でもう一度拭き直し、結ぶ紐が緩まないように、滑り止

めとして、上の節と下の節とで引つ張り合いながら、硬く締めるのです。

自分も背伸びして、何か手伝おうとしたものでした。取り付けが終わると、家族皆で『君が代』を歌って祝うのでした。

・国として守らなければならない行事

(元旦・建国記念日・天皇誕生日・憲法記念日)

・子供が健康に育ち成人しました、お年寄りの長寿を願
い、ご先祖様を敬う日

(子供の日・成人の日・敬老の日・春分の日・秋分の日)等、祝う目的がはっきりしていました。

その思いは、大人になった今でも変わることなく続いていきます。

新聞配達員の人から、「お宅は祝日になると必ず日章旗を挙げますね。それが社内では話題になっているんです」

日章旗を掲げることが話題になる程、国旗掲揚をする人が少なくなっているということです。隣の家でも小さ

い旗を揚げていましたが、いつの間にか見られなくなりました。

③ 国旗を掲揚して

仙台市の中心部から西に一キロほど行ったところに、評定河原公園があります。近くを清流広瀬川が流れ、一つ上流の大橋を渡り坂を上ると、伊達政宗の居城青葉城へと続くのです。

周りが緑に包まれ、落ち着いた散策のコースとして市民に親しまれています。テニスコート四面、東北大学陸上競技場を抱えるように、真中に野球場があるのです。両翼が九十二メートル、センターで百七メートルという公式の野球場です。

この野球場で国旗掲揚をさせて戴いたことがあります。十六チーム参加した連合町内野球大会のときのことでした。

君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巖となり

て 苔のむすまで

国旗の掲揚には、用意周到な準備が必要です。演奏に旗の到達がびったり合うよう、ポールに自分なりの五節に分けた目印をつけ、気持ちを集中させ合図を待つのです。

「国旗掲揚を行います。選手の皆様、スタンドの皆様、ご起立、脱帽の上、掲揚台の方に「ご注目下さい」

の放送があり、皆の視線が一点に注がれるのを肌で感じ、いよいよ緊張感が増してきます。

やがて、鳴り出した厳粛で神々しい『君が代』の演奏。静まり返った周りの山々に、その調べが響き渡ります。

一緒に歌う『君が代』では、今までに味わったことのない感情が込み上げてきて、胸から溢れ出しました。

国旗が中間まで来たとき、おおよそ全体の感覚が掴め、これで最後まで行けると思い、弛めることなく紐の感触を手で味わいながら、天に届く思いで、一卷き一卷き、手繰り寄せました。

演奏が終わった瞬間、国旗掲揚をイメージ通りに合わせて行うことができた喜びが、にわかには湧いてきました。大勢が見守る中、このような大役を果たせたことを、父を始め、ご先祖さんたちに感謝しました。まるで国家的行事に携わったような思いで、有難くも、もったいない気持ちになりました。

紐に弛みがなく、国旗が絡まないことを目で確かめ、余った紐はきれいに整え、私の大役は終わりました。

澄み切った青空に、白地に赤い『日の丸』が、風を受けて爽やかになびいている情景は、今でも自分の脳裏に、最高の思い出として焼きついているのです。

④「面接の発言とお言葉（月例研修）」

（平成元年十一月十三日）

道にご縁を戴く、ご面接の日です。おやかたさまの前に七人が一列に並び、私が最初に発言させて戴きました。おやかたさまはすべてお分かりになるので、何か言われ

たら何でも「ハイ」と言うんですよ、と聞かされていました。

おやかたさまの目の前に正座すると本当にすべてを見通されているのだと感じて、グツとくるものがありました。発言の後、お返しのお言葉を戴きました。

七人全員の発言が終わると研修室に戻り、一人ひとり感想を聞いて戴き、緊張から放たれた気持ちになりました。

当日、おやかたさまの特別な計らいにより、皆さんにもう一度、発言の機会を与えます、と仰り、二度の発言の機会を戴きました。

私は、一度目の発言を修正しようと思いましたが変えることができず、全く同じ発言になってしまいました。

【一回目の発言・二回目も同じ発言】

林 はい 宮城の林篤男でございます

只今は 月例研修に 参加させて戴き 誠にあり
がとうございます

これからは 親を中心に 家族をまとめ 世のため 人のため 自分建替えのお行に 励ませて戴きます 有難うございます

【二回目のお返しのお言葉】
おやかたさま

【二回目のお返しのお言葉】
おやかたさま

あのね あなたのなかで 只今ですよ
あなたという人は 欲の欲で 欲ばかりだから
困った困った 男なら欲の「よ」の字もないように
に 何とかして この道に 自分で自分を バカ
バカバカにならないで 喜んで実行できるように
立ち上がりましょうね 頼む頼む お頼みます
ね どっこいしょ
これが本当ですから この道は 貴方のようなお
方が もう一遍 根っこから やり替えないと
バカらしいんですよ
気がつきましたね お頼みいたします どっこい
しょ

あなたの誠で 段々くくご自分のぐるりのお方
が ご立派になりますから これからのご自分
は 誠になり切って 人並みの仕合せ者として
堂々と 日本ていこく(帝国、埴国、底国)をい
かにもですよ 拜んでく 拜み了すんですよ
お願い致します どっこいしょ これが本当です
よ 本当の本当です さ どっこい

⑤ 国を思つていこう

道にご縁を戴いて今年で三十五年になります。
今、こうしていつも大阪に戻る自分は、見守られ、
抱かれているのだなあ、とつくづく思うのです。今まで
は国を思うことに力を入れておりましたが、ここに来て
少し考えが変わってきたような気が致します。国は自分
の身の内にあり、国替えは自分の思いを建替えることだ、

と思うようになりました。

お役に立つとは、何かをすると云うのではなく、みたまさんが能(はたら)きやすいように素直な自分になること、みたまさんの周りの汚れを取り除くことにより、能きとなって表れるのだと思われました。

「さえかえる 月に照らして見せようで おのれの奥のくもりなきかを」

もし、あたらしい道にご縁を戴かなかつたなら、今頃、どうなっていただろうと思わされるのです。

「道と自分と一緒に」を、常に自分のものとし、みたまさんに添い切れますよう、みたまそのものに成れますよう、日頃の「お行」に励ませて戴きたいと思えます。



父に代わって「お行」

——お陰信仰から世直り国替へ—— 自分建替へ——



新潟 金内忠男

初めはお陰信仰？

私は、平成四年の一月、三十五歳の時に、この道にご縁を戴きました。平成四年ですので、ご明断とかご面接は戴いておりません。ですから、今のよう録音テープでご垂示をお聞きすることはあっても、松の間で、直にお声を拝聴したことはありませんでした。

このあたらしい道の場に戻って来て、色んな方とお話させて戴いております。日頃、自分で思ったことで、これはどういうことなのか、ということがあると、その問題を持ち帰ってくるのです。そうすると何となく、この場ではですね、先輩道友の方たちとのねりあいとか、

また実際に、その場で起きてくることを通じて、何となくですね、その問題の答えをもらって帰るようになるんですね。

自己紹介しますと、私はですね、昭和三十一年の二月二十七日に、新潟県長岡市の西中野侯っていう、静かな農村で生まれました。皆さん、ご存知だと思っんですけども、新潟と言えば、確かに米の生産地ですね、新潟県は日本一ですね、国全体の八%生産されているそうです。酒造ですが、日本酒の生産量はですね、残念ながら第三位ということで、一番目は灘のある兵庫、二番目が京都です。

この道にご縁を戴いたきっかけですが、これはもう紛れもなく、お陰信仰なんです。と言っても私個人のことではなく、父親のアルコール依存症を治したいという思いからここに来て、ご縁を戴きました。ここがですね、私自分でも面白いなあと思うんですけど、何かわけがあるのでしよう。ちよつと披露させていただきたいと思

ます。

*村長になった父がアルコール依存症

父のアルコール依存症の原因っていうのは、私も色々考えてみましたが、こういうことだったと思います。父は、以前はほとんど酒は飲まなかったのです。それが、村長になってしまつてですね、だいたい五年位経つた頃に、昭和六十年ですが、環境省で、「全国名水百選」っていうことをやったんですよ。その一つに、私が住んでいるところが選ばれたわけです。そこに今度は市が目をつけて、周辺を十町歩位でしようかね。全部買収して公園を作りましょうということになったんです。うちの父も結構、人がいいものですから、頼まれて、用地買収の手伝いをやり始めたんですけども、中々うまく行かなかつた。というのも、今は米の値段つてけっこう安いんですけども、その頃は、高かつたんです。それこそ米だけ作っていけば生活できるような、そういう時代だったん

ですね。

だから、田圃を売ってくれと言うと、しまいには涙ぐんで、「これからどうやって生活していったらいいか分からない」という人もいました。結局、二年ぐらい交渉したんですね。

大体、農家の方はですね。昼間いせんから、朝めし前に行くんですよ。私どもは、めし前に行くと、朝茶の代わりに朝酒が出るんですね。湯飲み茶碗になみなみと注ぐのです。それを飲まないと話聞いてもらえないということ、大体父も気が弱い方なので、毎日飲んでいたので、それが二年位続いたんです。そのあとですね、買収が終わった後も、ちよつと朝寄つて飲んだりしていたんですね。それで、バイクに乗るんだけど、酒も飲んでるわけですよ。それはまずいということ、先の方にもよくお願いしていたんですね。

それからですね、よく春とか秋には交通安全週間がありますけど、困ったのは、父は関係なしに乗っている

ですよ。だから、以前にも、坂道を走っていて田圃に落っこちたんですよ。それを引き上げるのは大変だった。そんなことをしているうちにですね、市の方から、町長会合があるので来てください。その後、ちよつと懇親会があるので、車とかは乗って来ないでくださいという話があったんです。

うちの親父も一応、人の車に載せてもらつて、その会合に行ったわけですが、私は仕事から帰つて来て、あまり見たことないバイクが停まっているのを見たんです。どうしたのかなと思っていると、父は他人のバイクに乗つてきていたんですよ。それでこれは困つたなど思つてですね、色々調べてバイクの所有者のところに行つて、実は自分のバイクと間違えてということをお話したんですよ。けど、いやもう警察の方に盗難届を出しました、というのです。

しかし、これはやばいなということで、出頭ついでなんです。うかね、うちの親父と一緒に警察行つたんです

よ。そうしたら、疑うんですね。警察署は疑うことから始まりですから、とりあえず別室に来て下さいって言って、同じことを何回も聞くんですね。五時間位は同じようなことを聞かれたらしいです。後でうちの娘から聞いたのですが、刑事さん二、三人で、「お宅さん本当にバイク持ってたんですか」ってことで家まで見に来たそうです。そうしたら、大体言っていることが合っているってことで、いいですよと家に帰らせてもらえたんです。本当に困ったことだなと思っただけです。そうしたらですよ。もつともつと進んで、毎日、朝から一升酒を必ず飲むようになってしまったんですね。

*父の代わりに「お行」に行きます

これは本当に困ったなあ、どうしたらいいかなと思っただけです。以前、姉が十九歳のときにあの頃、珍しかった糖尿病になって、医者からもう手遅れですねっていうことを言われたんですけども、ある方にお話を聞

いて戴いて、漢方薬で直してもらったんです。その方を思い出して、今のこういう状況を言って、父親がこんな形なんだけど、何とか直してもらえませんかねって、話をさせてもらったんですよ。そしたら、その方ですね、「いや知っている。そういう場所を私は知っていますよ」って話だった。どういうことかかっていうと、「三ヶ月間行ってお行をすれば直りますよ」って話なんだけど、いやそれでは是非、お願いしますってお願いしたんですよ。そうしたら、一緒に着物と袴を持ってきてというので、全然分らないんですけども、そのお行の中で「踊り」とかがあるのかなと思っただけで、もう踊りですから、この松の間と違っただけで地味なんじゃなくて、ですね、明るいものですね。紫の明るい色のものを持たせていたんですよ。何とかうまくいくのかなと思っただけですが、一ヶ月半位経ったある日、突然、うちの親父が帰って来ちゃうんですよ。さっぱり分からないから帰ってきてしまった、という話ですね。だから、その紹介された人か

ら電話が来て、「もう駄目だ、どうにもなりませんよ」
っていう風に言われたんです。それで私は、何か知らん
けど、「いや、私がそこに行つて、うちの親父の代わり
にお行します」って言つたんです。知らないうちに言っ
てしまったんですね。それが本当にもう自分のみたまさ
んからだったのか、それは分かりませんが、不思議なこ
とだと後で思いました。これが私のこの道にご縁を戴い
たきつかけなんです。

*「こ」は宗教と違つ

私は、自分の父のアルコール依存症を治したいってい
うことで、お繋がりを見せて戴いて、その後ですね、親
父は平成四年の七月から九月の三ヶ月で下座を何とか
させて戴いたんです。大祝の写真にうちの父親が写って
いました。三十一年位前の話ですね。ちょうど私が今、
父と同じ位の年なんですけども、その頃に三月下座をき
せてもらったんです。

そして、毎月、場に戻らせて戴いて、道友の方と練り
合ひさせてもらつていたんですけど、ある方がですね、
「こは、そんな病気の治すところではないんだ。そん
なことなら、やめろ、やめなさい」って、言われたこと
がありました。

また、ある道友の方はですね、「もうお父さんは高齢
だから、もう好きなように飲ませてあげたらいいですね」
と言うんですね。このときの私は、この道の方たちって
薄情者だなと思いましたがですね。何も分からなかったの
で。

一応、結果的にはですね、父のアルコール依存症は治
ったんですよ。だけど、七十歳の時にどういうわけか急
に歩けなくなつてしまつたんです。それから、九十歳位
まで二十年間ずっと歩けない状況でした。うちのおふく
ろはその間、ずっと面倒見てました。

そういうことで、本当に一般の宗教であればですね、
見返りに、それと引き換えに、何か得るものがあるでし

ようけれども何も無い。ここはやっぱり違うんだなっていうことを実体験しました。そこで私は思いました。うちの親父が、ですね、ここにご縁を戴いた、そして、自分の体を引き換えに、私をここに連れて来てくれたんだ。そういう意味があつたんじゃないかなって思いました。本当に普通の宗教と違うんだ。ここはもつと、数段レベルの高い志を持った所なのだと感じたのです。世の中の人々を、国を、良くすることを思うような所なのだ、と思いました。

ある晩の発言のときに「トンボ帰りになるかも知れませんが、毎月戻ります」とそういう「決め」を言わせてもらったことがあるんです。

それから、ずっと毎月戻らせてもらっているんですけども、ただ一度だけ、戻れないことがあったんです。それは、平成十七年の十二月。その日戻らせてもらおうと思つたら、大雪で電車が止まつたんです。で、その月の最後の週に延期して戻ろうと思つたら、今度は隣のお母

さんが六十八歳で乳がんで亡くなり、葬儀に出て、その月は戻れなかつたんです。そのことがずっと自分の中に残っていて、決めを破つてしまったことを気にしていたんです。でも、それもですね、コロナが蔓延して令和三年の二月に場が閉鎖されて、戻れなくなつたときに、「場に思いを送ることを」をさせてもらい、こういうときはこれでいいんだ、と思わせてもらいました。

*不思議なことも見せられる

あと、不思議なことが随分あつたんですね、若いときは、ずっとこの場に車で戻らせてもらっていたんですが、そのうち、娘が大学に入学して金がなくなり、車も、高速料金もかかるし大変だと思つてたところで、バイパスでスピード違反で捕まつた。結構、罰金が高くて、これは高速は駄目だと思い、車をやめて、電車の「青春18切符」でしばらく戻らせて戴きました。

そんな中でですね、色んな不思議なことも随分経験さ

せてもらいました。考えられないようなことが起きるんですよ。皆さんもそういうことを通ったことあるかと思うんですが、実際に、ここは不思議な事が起きるんです。

それをまとめてお話ししますと、例えば、最近のことですけども、令和三年の三月、長女が二十年前に糖尿病になりましたけども、今度は長女の日那から電話が来てです、「大変なことになったから、すぐ病院に来て下さい」とっていうんですよ。行くと、夫から「くも膜下だ」と言われました。医師の説明ではレベルが一から五の間で、五だつていうことで、手遅れですよと言っんです。うまくいっても後遺症が残るといふ話だったので、それがわずか三日で意識が戻つてですね、そのあとすぐに退院ができて、今どこも後遺症がないんですね。普通に仕事をしているんです。もうとても不思議な、有難いことだなと思いました。

あと、令和五年の夏のことなんですけど、新潟はフェーン現象で今まで経験したことのないような高温と雨

が降らないつていうことで連日、報道されました。私も米農家ですから心配でね。もう七月二十日から八月の二十七日まで一切雨が降らなかつたんです。テレビでも稲が枯れていると報道していました。それで、昔ですね、「雨乞い」をしていた、そういう仕事の方たちが集まってやつたんですけども、ちょうどですね、一番水が必要なときに、一回や二回ならそんなに珍しくないんですけども、八回も雨が降つたんですね。だからこれは、やっぱり自然からの加勢だつたんじゃないかってね、そう思いました。また全然理解していませんが、そういうようなことがあつて、米ができたということで本当に地元の人たちは喜んでいました。新潟県全部に雨が降つたわけではないんで申し訳ないですが、私どものところは降つてくれて、本当にうれしかったです。

*祖母の「みたままつり」で、自分が身上に

私は、今まで健康そのもので来ましたが、今年の一

月に身上をいただきました。それは不思議なことに一月の二十四日に、ですね、結構、道友の方はやっておられるって聞いたんですけども、おばあちゃんの「みたままつり」をやらせてもらったんですね。

おばあさんというのは、おやかたさまと同じ明治三十四年生まれで、昭和十六年の十一月二十五日に四十歳という若さで、胃と腸の間にがんが出来て、物を食べられなくて、食べると苦しくなってしまう。結局、痩せて餓死してしまっただけです。

そういう先祖の「みたままつり」をさせてもらったんですけども、それがちょうど偶然かどうかわからないんですけど、その四日後にですね、私が具合悪くなると、体温が急に三十八度二分の高温になったんですね。のが痛くて物が食べられなくなりました。

ちょうど土曜日で病院がやってなくて、我慢しているしかなかったんです。すると翌日は、三十七度四分位に体温が下がったんですけども、月曜日に病院に行こうと

思っただけです。最初は知っている病院に行こうと思っただけですが、ここはいつも混んでいて、ほとんど行ってもすぐに見てもらえないんだらうけど、そこに行くしかないと思っただけです。

ところが、朝起きたら、待てよと。自宅の近くにあまり聞いたことない耳鼻咽喉科があって、「そこに行こう」と思われたんですね。家に誰もいなかったんですよ。それで、コロナかも分かりませんので、苦しいんだけどずっと病院にいたわけですが、そこで調べてもらうとコロナじゃないから、他の検査をしましょう、という話になったんです。ところが、そうしたらですね。いきなり、手遅れですよ、もう命危ないですよって言うんですね。それで、急に紹介状を書いてもらおうんですね。総合病院に行ったらわけですが、確かに私も具合悪くて水も喉を通らないし、飲んでも最後には鼻から水が出るんですね。そこまでいったんです。で、総合病院に行ったらすぐ入院ですよって言われました。

道友で詳しい方は、そうなれば注射を打って直すって知っておられました。ここで入院したらやっぱりそういう治療をしてくれて、やっと今、健康になりました。病名は扁桃腺周囲膿瘍といって命落とすこともある、ということですのでよかったです。

そんなことで、そのときもきつとみたまさんが導いてくれた。多分、私がこの道につながって、自分の父親やおばあちゃんを始め先祖さんたちが、私に果たしをしてくれると期待してくれているんじゃないかなって思いました。有難いことだと思えます。

だから、おそらく、今回の私の身上は、おばあちゃん、の苦しい思いを体験させてもらったんではないかな、と思います。おばあちゃんはそので多分、いい風になってくれたと思います。私も体が良くなったから、そういう気がします。

これからもご先祖さんと共に、金内家一族の果たしを共にさせて戴きたいと思えます。みたまさんが色んなこ

とを教えてくれるから、それをちゃんとキャッチするようにして、また、聞いたことを実行していきたいと思えます。中々キャッチできないんですよね。また、ときには世間の方にも聞いて戴いて道のことを少しでもお伝えできるようにすることも出てくるかも知れません。これからも色んなことを先輩の方たちに練り合いさせて戴いて通らせて戴きたいと思えます。

(令和五年十一月お式「大ねりあい」より)



日本の名水100選

「杜々の森湧水」

(とどのもりゆうすい)

(新潟県(長岡市)HPより)

自分建替え



—ご先祖さんから期待されて—

大阪 竹田正史

*この道に家内と共に「縁を戴く

今日は、自分自身の「さらし」をさせて戴こうと思います。「思いのしこり」「思い上がり」がテーマです。

私は、昭和二十二年六月に、長崎県の島原市にある小さな村で生まれました。戸部ほどの半農半漁の村で自然に恵まれ、のびのびと育ちました。子供の頃から正義感の強い性格で、例えば、相手がガキ大将でも、悪い事をする相手は許せず、向かっていってやっつけていました。

家業は豆腐店でしたが、兄が継がないというので、何となく自分が豆腐店を継ぐつもりでいました。ところが、中学一年のとき、技術・家庭科の授業に、コンパスや定規を使って設計などで使う「展開図」を描くことが楽しく、夢中になりました。その頃から図面を描く設計技師になるんだという思いが強くなり、工業高校に入って建築を勉強しました。その後は、長崎市役所に奉職し、建築の仕事に従事しました。

私は、高校生の頃より、なぜか、居間に飾ってある祖父や祖母の写真をずっと見ていたりする、ご先祖さんのことが気になる青年でした。結婚してからは、義父から色々な話を聞かせてもらいました。その中で印象に残ったのは、「因縁納消」と「この世に何も無駄なものはない」という二つの言葉でした。

あたらしい道には、家内が先にご縁を戴きまして、その三カ月後の平成六年二月、私もご縁を戴きました。きっかけは、家内が長崎支部の西真李子さんを通して月刊

誌を戴くようになり、その中で、「あたらしい道は因縁納消をするところだ」と聞いたことです。因縁納消の話は義父からよく聞いていたので、あつ同じだ、とすぐに思いました。

*下座中に救急車

平成二十四年一月に、二回目の下座をさせて戴いたとき、尿が出なくなつて救急車を呼んでもらい、近くの病院に運ばれたことがありました。手当てしてもらつて、そのまま下座を続けられたのですが、長崎に帰ったら良く検査してもらつて下さいとのこと。前立腺ガンの疑いがある、と言われました。

長崎に戻つて、病院に行つたところ、PSA値が通常は四のところ、二十四もあるので間違ひなくガンだろうと言われ、細胞を採つて検査をすることになりました。ついでに膀胱の方も診ましようと言つて、MRIも撮りました。私は、これらのことはみたまさんからの知らせ

であつて、病気ではないと思つたので、あまり気にはしていませんでした。

それから一週間後、病院に結果を聞きに行くと、前立腺にガンはありませんでしたが、膀胱のMRI検査の結果、*カゲ*が見つかり、内視鏡で初期のガンと判明し、きれいに処置したので心配ない、ということでした。

このとき、私は、「この先生は天から使われているみたいだな」と思いました。それは検査や処置をする日が場に戻らせて戴く日と重ならず、何事もスムーズに進んだからです。もちろん、感謝申し上げますと共に、これは何を知らされているのだろう、よく掘らなくては、とねりあいも随分してもらいましたが、そのときははっきり分かりませんでした。

*竹田家の因縁

それでも思い当たることはありません。まず、前立腺や膀胱ということから、やはり「色情因縁」ということ

です。また、何か先祖からの因縁納消すべきことがあるのかも知れないと、何となく思わされました。

元々の竹田家の先祖は、大分県竹田市の難攻不落と言われた「岡城」（竹田城）にいたことが分かっていたので、城址跡に行つて清めさせてもらおうとお酒、塩を持つて草も刈ろうと行つたのですが、丁度、築城八百年祭があつて既にきれいになつていたんですね。それじゃあ、自分なりにもつと何かさせてもらわなきゃと思つたのですが、あたらしい道では、因縁納消はもちろんなんですけど、自分を建替えるところなんですよ、ということも気付かせてもらつて、「アー、そうだった」と改めて思いました。

それと共に、色々気付かせてもらつて、疑問も多々出てくるわけですね。岡城の頃は、大友宗麟の時代でもあつて、キリシタンという特定の信仰を持つ人たちの影響もかなりあつたようで、そうすると、私があたらしい道にご縁を戴いていたことを嫌がるご先祖さんもいたか

もしれない。

また、近いご先祖さんの中でも色々な人がいたわけでご先祖さんたちの加勢に応えるには、やはり、竹田家一族の因縁果たしを、子孫である私が少しでもさせてもらわなくては、と思ひました。親戚の話を聞くと、父の兄、つまり伯父とうちの父親は、理由はよく分かりませんが相克があつたようです。

また、色情因縁と言えば、家系図で分かつたのですが、男兄弟の子ども同士で血の濃い血族結婚をしていることが分かりました。他にも色々な確執があり、そういうことがどんどん出てくるわけです。因縁果たしを少しでもさせてもらおうと思ひました。そういうことを、ガンになりかかつて気付かしてもらつた気がします。

*場の常住に

あたらしい道の天の場で、常住（註：寝泊まりして奉仕をする）のことを思ひましたのは、丁度、そういう時

期のことでした。

また、住居を大阪の地にとの思いもあり、何かをやらせてもらいたいと思つたことを覚えています。

平成二十八年四月より常住者として、天の場に置いて戴くことになりました。その後、住居を大阪の地に、との思いもすぐに現実となつてやつてまいりました。

両親を看取り、相続も終え、土地・建物もスムーズに売却でき、色々な仕廻しによつて、天の場の近くに用意して戴きました。

そのうち、あたらしい道の場の常住の方々が十何人おられました、殆どの方が辞めて行かれました。そこで、私自身の葛藤が始まりました。自分が思つていることを言うべきか言わざるべきか、生来の正義感が頭をもたげてきました。

何とか自分がしなくては、という思いが段々、湧いてきて、ひよつとしたら、私が出て行つて実力行使してでも何とかしないといけない、という思いにもかられまし

た。でも、そのときは、色々教わっているのでなんとか我慢できるわけです。

*我慢でなく自分を拗つて悟る

でもそれが、「思いのしこり」なんだ、と後から分かりました。そのときは分からんですよ。成つてきたことを自分が悪いとは受け取れていなかったんですね。自分のものになくても、自分のご先祖さん、自分の前生にあるかもしれない、そういうことの積み重ねが少なくてもあつたと思わされたのは、常住をやめて腸のポリープやらができ、体のあちこちがガタガタになってから、それらが全部治つた後のことでした。

小さい頃から今まで、くそ真面目で、正義感が強く、こうあらねばならないと、正義をかざして偉そぶるところがありました。また「我（が）」は自分の徳をほめる虫である」と戴いておりますように、自分は間違つていないとの思いが強い自分であつた、と思わせて戴きました。そのようなことを気付いて、もつと早く道式に切り替

えが出来なかったことが、こういうことになってしまったのでした。

これからは、もつとく信を深めて濃くして、自分づくりに励ませて戴こうと思います。

そうして、あたらしい道・天の場で、何なりとさせて戴きたいと思っております。



国指定史跡「岡城跡」 (大分県竹田市HPより)

寄稿

憧れるのを止めましょう

東京 厚味三樹二郎



この言葉は、昨年のWBCで日本チームが、アメリカチームと対戦する前に、大谷翔平氏がチームメイトに向かつて発した言葉として有名になりました。私は特に野球のファンではありませんが、昨今メディアに登場する、何とも言えない氏のさわやかな人柄に感心していますが、私はこの言葉から、昔習った古文の意味を思い出しました。「あこがれ」と云うと言葉の元々の意味は、「あこ、あく」は魂のこと、「かれ」は「離れる」或いは「枯れる」、「刈る」、「殺す」という意味にも繋がるようで、「**魂が離れる、心が身体からはなれて彷徨う**」と云う意味になるようです。私の少年期(思春期にはまだ届かない頃)、石坂洋二郎原作の「青い山脈」と云う小説が人気を博し、映画化(池部亮、原節子主演)もされ、藤山一郎と奈良光江が歌う主題歌、「青い山脈」「山の彼方にあこがれて」の「若く明るい歌声に 雪崩も消える 花

も咲く 青い山脈 雪割桜 今日も我らの夢をよぶ」や、「山の彼方にあこがれて 旅の小鳥も飛んで行く 涙たたえた愛しの君よ 行こうよ 緑の尾根超えて」なんて云う歌詞が、一世を風靡していたことを思い出します。

世の中は戦争下の抑圧と、直後の貧困の時代から解放されつつあった、国民が「自由と民主主義」や「マルクス主義」と云う、あたらしい言葉（イデオロギー？）に心を奪われていた時代だったと思います。しかし私自身歳を重ねて、性格が皮肉っぽくなってきたせいも、この歌詞が、私たちの魂を身体から離れさせて彷徨わせ、洗脳する意図があつたのではないか、などと思いはじめています。この国の言葉は、古くから「言霊」と云って、言葉には働き（霊力）があると信じられて来ています。ですから昔の年寄りには、うっかり妙なことを言ってしまったたりすると「くわばらくわばら」などと唱えていました。丁度「青い山脈」が一世を風靡していた時に、カール・ブッセの「やまのあなたの空遠く『幸』住むと人のいう ああわれ一人尋めゆきて 涙さしぐみかえりきぬ 山のあなたになほ遠く『幸』住むと人のいう」（上田敏訳）詩も大変はやっていたらしく、私の 10 歳上の兄が、ドイツ語の原文でぶつぶつ呟いていたのも覚えています。大学同期で同室（全寮制でしたから）のドイツ語を選択した男も、盛んに「イーベルデンベルゲン バイトトウ バンデルン」などと唱えていました。このカール・ブッセの詩の最後の方の「山のあなたのな

「ほ遠く」と云う表現は、求めても求めても、求め得ない「あこがれ」の本当の意味を的確に謳っているように思います。この国は太平洋戦争後、すっかり欧米型文化の価値観や思考方法が、人類の理想的な姿であると思ひ込まされて来た感があります。大谷翔平氏が「あこがれるのを止めましょう」という言葉は、戦後WGI P（戦争犯罪広報計画）の呪縛から解き放つ言葉でもあるような響きを感じたのです。

また別の機会に、こうした言葉を発した若い大谷氏が、中村天風と云う、明治から昭和にかけて、この国の精神文化に大きな影響を与えた、ヨガを基本とした「心身統一法」を説く修養団体天風会の書物の愛読者であることを知りました。実は私自身、52年前、34歳であたらしい道にご縁を頂いた時に、年配の道友で、天風会で行をされたと云う方がいらっしやって、其処で初めてそう云った団体が存在することを知りましたが、当時は、特にそれ以上興味を持つこともなく過ごしてきました。しかし私が73歳で最後の台湾での仕事を終えて、東京の自宅で過ごすことが多くなった13年ほど前に、偶々立ち寄った最寄りの書店で、中村天風と云う名がある本が眼に入り、何気なく取り出して開いたページに、天風氏が死の際に門人たちに向かって「自分が今迄言ってきたことはみな嘘だ忘れろ」と云った趣旨の言葉を言っている所が眼に入りました。

この言葉が強く印象に残りましたのは、私自身直接お聞きしたものではありませんが、多分私があたらし

い道にご縁を頂く少し以前だと思えますので、昭和40年代前半だと思いますが、おやかたさまが周囲の方に向かつて「私の今迄言ってきたことはみな嘘です」と仰られたことがあると、先輩道友から聞いたことがあったからです。

私は、おやかたさまが「私と同じことを言う人が居たら、その過去を調べてごらん下さい」と云われたことを覚えていましたので、何時か機会があれば、中村天風と云う人物の伝記でも読んでみようとは思っていたところ、昨今、大谷翔平氏がメディアを賑わせるようになって、漸く昨年（令和5年）の暮れから正月にかけて、『中村天風伝』（松本幸夫著、総合法令）と『若き日の天風』（おおいみつる著、春秋社）の二冊を購入して読んでみました。

さらに、丁度昨年（令和5年）暮れに、旧い道友で天村先生の鞆持ちとして、先生と政財界の著名人との対談に、同席する機会が多かったS・I氏と、お会いする機会が在りましたので、もしかすると、おやかたさまが天風氏について何か言われていることを聞いているかも知れないと思い当たり、その辺の事情を尋ねてみることにしました。

天風氏は明治9年（一八七六年）生まれで、天村先生は明治24年、おやかたさまは明治34年のお生まれであるところから、天風氏と天村先生とは何処かで接点があったと考えても不思議な事ではありません。

私が期待した通り、S・I氏は昭和43年（天風氏が29歳で亡くなられた年）に天村・天風氏の面会の場に同席したことがあり、おやかたさまが、天風という人物に対して、「おもしろい人ね」と仰られていたことを語ってくれました。

天風氏は、柳川藩の藩主の血筋に繋がる藩士で、維新に紙幣寮抄紙局（現在の財務省印刷局）の初代局長の三男として、東京都北区王子で生まれ、6歳から柳川藩お家流の抜刀術随変流を習い、13歳までは本郷の小学校に通い、近くの官舎に住んでいたイギリス人技師の家で自然に英会話を習得し、桜の名所の飛鳥山を遊び場とし、13歳からは福岡の頭山満とうやまみつるの下に預けられて、2年間修猷館しゅうゆうかん中学で学んでいます。さらに氏は、15歳で従五位（伝記からは上か下かは分かりませんが、この時代は、従五位下じゅうごいげ以上は華族です）と云う官位を授けられると云う、上流で裕福な環境で育ちながら、中学在学中の不慮の事故が原因となって、15歳で修猷館中学を退学し、軍事探偵の鞍持ちを振り出しに、日清、日露戦争下の支那、満州の地で、人斬り天風などと云われて縦横に活躍しています。日露戦争では、113名の軍事探偵のうち、生還できたのは氏を含めて9名と云うことですので、想像を絶する過酷な任務であったことが伺えます。戦後29年で奔馬性肺結核に罹患していることが分かるまで、その少年期から青年期の不羈奔放な性格のまま、痛快でドラマティックな活躍を続けています。氏はそれまで、国の為、義の為には、任務に殉じて

戦場などで命を失うことなどには、殆ど恐怖を感じなかったようですが、29歳で初めて病気を得ての死と云う、大義名分を失った死に直面して、初めてその恐怖から逃れる道を求めて、35歳までアメリカ、ヨーロッパからヒマラヤのカンチェンジュンガでのヨガの行まで、自身の存在意義を探索しています。

ヨガの修行の結果、病気の治癒と自我の覚醒の境地に達してから、日本への帰国する途中には、辛亥革命の孫文の最高顧問として働いて莫大な資本を獲得し、37歳から43歳までは、日本の実業家としての成功の道を歩んだ後、43歳で突如救世済民のために地位、名誉を離れ「心（精神）身一如」「自我は宇宙霊の別れ」「人の本姓は靈性で、やみくもに神仏などに頼るのではなく、喜んで積極的に生きなさい」などと説くと云う、八面六臂の大活躍をした、正に「面白い人ね」と云う言葉がぴったり当てはまる痛快で、実に素晴らしさを感じる人物です。

ただし、私の心に一つだけ引っ掛かるところがあります。それは、氏が「自我」の心（精神）と云うものは宇宙霊の別れで、心と肉体は一如（心身一如…心と体は繋がっている）であることと云われていることです。確かに最近の医療におけるプラセボ（偽薬）の効果や、超遺伝子学（エピジェネティクス）では、身体の状態や遺伝子の発現が、生育環境や心（考え方、思い方）で変わり、遺伝なども、必ずしも設計図（遺伝子…DNA）通り発現しない例が報告されて、一部の量子生物学者は「DNAは運命ではない」

と云っています。しかし、全体的に見れば、矢張り人は先祖、親から子へと受け継がれる因縁の連鎖の中で生かされていることに変わりがないようです。「心身一如」とか「因縁一切なし、全て心の所産」とは言い切れないのが人の現実の姿ではないかと感じています。私には心理学、生理学などで用いる、意識、無意識、潜在意識や本能などと云った言葉を科学的に識別できるような知識はありませんが、直感的に、人の意識（心）とは、人の成長がある程度の段階に達するまで働かない機能で、「精神」とか「理性」、「概念」なども、意識の働きで、人が遺伝的に、自然や文化的な環境条件に影響を受ける機能ではないかと感じています。この感覚で行きますと、「魂とか精神」も文化的環境の影響を受けて作られる大和魂、アメリカ魂といった文化的な「心」の状態ではないかと思っています。

あたらしい道では、魂（たましい、みたまではありません）は、「みたま」の風呂敷とされています。天風氏の言われる「宇宙霊」とは、あたらしい道の「みたま」のことを指していると思いますが、歴史的な宗教の世界では、天風氏のヨガの行に象徴されるように、自我を中心として「宇宙霊（みたま）」と繋がる手段を用いています。キリスト教にしても、その信仰は、個人（自我）と神の契約に基づいていますので、自我の判断による神の選択がその中心となっています。しかし、歴史的に見て、世界には、自我の行を中心とする立派な宗教が、数千年も続いているにも拘らず、今に至るまで、それらが説く理想的な社

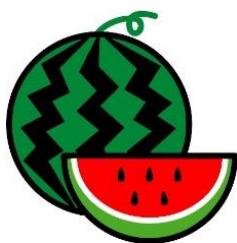
会を実現できてはいません。

あたらしい道は「日本人の魂を呼び醒ます所」と聞いています。この場合、「たましい」と云う言葉が使われていますが、あたらしい道の順序では、個人の経験から、「たましい（精神）」の目覚めた者が場へ寄せられて来て、そこから「みたま」の覚醒から成長へと導かれる道であると感じています。この順序は、「あたらしい道は、みたまになつてからのお行」（みたまに沿うための生き方）と言われていることから理解できると思います。私のご縁を頂いた時期には、盛んに「男なら国を思え、国を思うなら自分をつくれ」（言霊ですから「造れ」か「創れ」か「作れ」、「繕う」かは分かりません）と言われていました。自分としては、「いいこと言つて、いいことして、いいこと思つて、いい人になる」という順序ではないかと思っています。

冒頭に「懂れるのを止めましょう」という大谷翔平氏の言葉を引きましたが、人の心（思い）は、自分が心地よい（？）ものに惹かれて、離れることがあることを語りましたが、個人の想うこと、神の教え（と称する考え）、思想など他の人の人の思いは、あこがれた人の心に入り込んで来ますし、自分の思いも周囲に影響を与えるようです。現在、人間社会で最も進んだ科学は、量子力学であるそうですが、一般相対性理論と宇宙論の数理論物理学で、二〇二〇年のノーベル物理学賞を受賞したロジャー・ペンローズという人は、

人の意識は量子的であって、死ぬとその意識は、宇宙に拡散していくという説を立てていますが、もっと古くからある世俗的な現象で「憑き物」「憑依」などといった現象もあります。

これらはみな「あこがれ」の一現象のような気がします。如何でしょうか。





太宰府天満宮御本殿

日本の人柄

菅原道真

千葉 橋本正和



東風吹かばコナ 匂い起こせよ 梅の花

あるじなしとて 春なわすれそ

有名な菅原道真の歌である。道真は学者一家の出身であり、和歌より「詩臣」と称されているように詩が上手である。もともと学者の家に生まれており政治家では無かったのだが、時の天皇であった六十九代の宇多天皇、七十代の後醍醐天皇に召しい出さ

れて、やむなく職についた人である。それが大きな転機となって、波乱万丈の生涯を送るようになる。

菅原家が菅原を称するようになったのは、道真の曾祖父古人フルトの時代からである。垂仁天皇の時代に、皇后が亡くなり天皇が殉死を無くすべくその代替え案を求めたのに対して、野見宿禰ノミノスクネが土師部ヒハジベに人や馬などを作らせて、これを殉死者に替えて陵墓に建てておくように進言して採用されたと云う埴輪の起源伝承を載せ、この功によって野見宿禰は土師部となり、以後土師氏は天皇の葬儀儀礼などに従事していたが、古人は、天応元年（七八一）六月に居住地の名をとって菅原を氏名とすることを許された。その後も土師部からは、秋篠、大江への改名を許された一族が有る。現在も奈良市菅原町にその名を残しており、菅原神社と菅原寺（喜光寺）がある。道真の曾祖父、菅原古人は土師の氏名を改め従来^{ノミ}の葬送儀礼の儀礼から脱して新たな道を選んだのである。彼

自身世に認められた立派な儒者になったが「家に余財なく、諸兒寒苦す」と云う暮らしぶりであった。

しかし、古人の四男で道真の祖父となる清公キヨキミは桓武天皇の詔によって、十五歳で時の皇嗣の従者となり、間もなく父古人の功により学業に精励する様に三人の兄弟と共に天皇からご褒美を戴いている。父古人の善行を受け継ぐことを期待しての天皇の思いであったと考えられる。

道真の祖父である清公は優秀な成績を収め、文章モノガタリ得業生トクゲイセイとなる。得業生は才知聡明で学業に優れ勉強の志がありながら、貧しい学生に時服と云う給与と食料を与えて学業に精励させようとしたものである。清公は当時最高の官人登用試験をうけた。与えられた課題について漢文で答えるというもので、八世紀の初めから二三〇年ほどで合格者が六五名と云われる難関であった。及第した清公はそれからどんどん出世をして四年後に遣唐判官に任じられ、翌々年に

は唐へ渡っている。清公の乗った第二船には最澄さいちようも乗っていた。帰国後も官位を上げ尾張介となつて任地に赴任し、「刑罰を用いず、よい政治を行った」とされている。清公が任満ちて都へ戻つて以後、嵯峨天皇のもとでどんどん官位を上げて行く。弘仁一〇年官位を貫い、学問の頂点に立つ文章博士となり、嵯峨天皇に文章を講じている。清公は父古人の期待に応えて学問に精進して身を立てるとともに培つた詩文の才によつて、嵯峨天皇を中心とした宮廷文壇の一角をも占めたのであつた。

道真の父、是善よしよしは、清公の四男とされている。「幼にして聡明、才学日に新たなり」と云われ、十一歳で嵯峨天皇に仕え、書を読み詩を作つたと云う。二歳で文章得業生となる。父清公はこの時には学問の頂点である文章博士モンジヨウハカセになつていた。是善もまた嵯峨天皇のもと、次々に官位を上げて承和九年には、文章博士となる。承和九年に父清公が亡くなつてい

る。七三歳であつた。清公が最初に文章博士になつたのが、五〇歳であつたから三十四歳で成つた是善はかなり早いのである。是善はその後もどんどん官位を上げて行き、貞観十四年（八七二）には六一歳で参議となつた。菅原家から初めての公卿任官である。

是善は古人・清公以来の善行を受け継ぎ、清公と重なる官職を得て、ついに公卿に登つた。また、清公と同じく文章博士となつて学問の頂点に立ち、公卿・官人、学者・詩人の多くのはその門弟であると云われるほどの隆盛を示すまでになつている。以上に見た古人・清公・是善が三代にわたつて築いてきたあり方を「祖業」として強く意識し、その継承と更なる発展を我が務めとしたのが、道真であつた。

菅原道真は承和十二年（八四五）の生まれ、当時、父是善は文章博士として活躍していた。道真は二二歳で初めて詩を詠んでいる。父が門弟に指導させて

のことであつた。

月夜見梅花

月耀如晴雪 月耀は 晴雪の如く
梅花似照星 梅花は 照星の似し

可憐金鏡転 憐れむべし 金鏡の転

りて

庭上玉房馨 庭上に 玉房の馨れる

ことは

「輝く月のひかりは、晴れた日の雪のように明らか
に澄み、月下の夜の梅の花は、照る星のようだ。鏡
の如き月が移動してゆくにつれて、庭園の梅の花ぶ
さが香ってくるのは、ああ、えもいわれぬことだ」

〔読み下しと現代語訳は、小島憲之・山本登朗『菅
原道真』(一九九八年)による〕第二句の梅花を星に
例えた表現は先例がないとされ、如何にも若い作者

らしい新鮮な表現とされている。また第四句の梅の
香を詠むというのも今迄のものには無く、白居易ら
の「暗香」と云う詩語を使って、やっと古今和歌集
で見られるようになってきている。おそらく、この
頃から菅原氏の将来を担う秀才としての教育が本格
的に始まったのだと思われる。貞観元年(八五九)
に一五歳で元服。貞観九年には文章得業生となり、
益々勉学に励むようになって行く。貞観一九年一〇
月には文学博士になった。道真も又父と同じく三四
歳で文章博士になったのである。菅原氏としては祖
父・父に続く任官であり、三代続いて学者の頂点に
立つことになった。それは父是善の期待に応え祖父
の業を継ぐ事が出来た証であった。しかし、文章
博士任官は道真にとって苦渋の日々の始まりともな
った。道真の詩に「博士難」と云う長い詩がある。
長いので一部を載せるが、そこに道真の父是善の温
かい思いやりが映されており、道真の苦悩を思いや

る父の思いが記せられている。

博士難

我為博士難 堂構幸経営

(我 博士と為りし歳 堂構 幸いに経営す)

万人皆競賀 慈父獨相驚

(万人 皆競い賀せしに、慈父独り相驚く)

相驚何以故 日悲汝孤經

(相驚く 何を以ての故ぞ、日く 汝が孤經コケイ

なるを悲しむ)

吾先經此職 慎之畏人情

(吾 先この職を経しに 慎みて 人の情を

畏れたりと)

始自聞慈訓 覆氷不安行

(始めて慈みの訓えを聞きしより、氷を覆みて

安らかに行かず)

南面僅三日 耳聞誹謗声

(南面して 僅かに三日、耳に 誹謗の声を
聞く)

無才先捨者 慘口訴虚名

(才無く 先に捨てられし者、慘口 虚名を訴

う)

教授我無失 選挙我有平

(教授 我れ失なし、選挙 我れ平有り)

誠哉慈父令 戒我於未明

(誠なる哉 慈父の令え 我を未だ萌さざる

に戒む)

「文章博士となった時、祖父以来の家業の基礎を私は幸いにも築くことが出来た。多くの人が争うように祝福してくれたが、父だけは、あわて怖れているようだった。父があわて怖れているのは、一体何故なのか。父が云うには『私はお前が頼る相手もない孤独な存在になるのを悲しんでいるのだ。文章博士は良い官職であり、収入も多い、だから人はお前

をねたみ、そねむだろう。私は以前この職を経験したが、その時は身を慎んで人の思惑を畏れ、はばかりでいたのだ』と。父の慈愛に満ちた教えを聞いて以来、心の休まる日は無かった。私は大学寮学生に授業をすることに決まったが、授業を始めて僅か三日目私を非難する声が聞こえてきた。私は今、文章得業生の推薦状を書いたがその推薦に誤りはなかった。それなのに、才能がないので選に漏れたものが、私に見識がないと悪口を云ったのである。私の教え方に誤りはなく推挙の選考は公平だった。それでもこんな非難が起こった。父の教えは誠に正しく、事が起こらない中に私を戒めてくれたのだった」

その後もそのような事があり、道真の苦衷は続いた。菅原家は曾祖父の古人以来祖業である学問に励み時の天皇の寵愛を受けて、類のない出世をしてきたのである。しかし、世にそれをねたみ、そねむ人も多い。そんな中で若い道真は大きな苦勞をしたの

である。その上、人としても立派なので、学者詩人として時世の中、一段と抜け出た学者であり詩人として注目されていたのである。時あたかも藤原氏を中心とする摂関政治の中でありいくら天皇の思召しが強くても、家柄が大きな問題になって来る。菅原家は土師家の出であり、それが学問を盛んにすることによって立派な家柄となるが、時の権力者から見れば下層出身としか思われぬ。道真の危惧通り、藤原家の思いになる時世になってしまふのである。道真はその力量を發揮してどんどん出世して行くが、時の摂政政治に阻まれて残念ながら左遷されてしまふ。その政治とはいかなるものなのか、その政治体制を見てみよう。

平安時代、政治の中核はほとんど藤原家が占めていた。摂政、関白、内覧などの要職は藤原家の要人の仕事になっている。時の天皇がどんなに権勢を持つていても、藤原家を無視することは出来ない力を

持っていた。宇多天皇は次に天皇になる醍醐が一五歳になった昌泰二年、出家された。一五歳になり、名実とも成人の天皇とみなされるので、宇多天皇の出家は醍醐の成人を見届けた上で、いよいよ念願であった仏事に専念しようとしての事であった。宇多天皇は醍醐天皇の右大臣に道真を選んでいる。「菅原朝臣は朕が中心のみにあらず、新君の功臣ならんや。人の功は忘るべからず」と説いている。

また左大臣に藤原時平を迎えた。基経が没した直後、公卿に成っていなかった時平を直ぐ公卿に抜擢し「第一の臣」としたのもほかならぬ宇多天皇であった。そして、時平もそれに応えて、政務に精励している。宇多天皇が醍醐天皇の側役として、時平と道真を選んだのは、藤原北家嫡流を担う時平と、「練正」をよくする道真を、新帝醍醐天皇の両翼としようとの意図からであった。道真が若い時平の足らざるところを補わせようと考えたことは容易に想像さ

れる。同時に道真と時平を組み合わせることで、異例の昇進をとげた道真への諸卿の反発を時平の存在によって、緩和させようとしたのである。

では、その二人の関係はどの様であったのであろうか。時平が道真を敵視していたという事は以前から云われていた。しかし、文学研究における道真の詩の分析からは、新たな理解が示されている。道真が時平に贈った詩は五首あり、何れも時平を讃えており、時平の詩をも讃えている。分をわきまえ、これ以上の君恩を望まない道真の思いを詠んだものがある。こうしたことから、文事を通してみる限り、道真と時平の間に対立的様相を見出すことはないと思われる。また宇多天皇・醍醐天皇・道真・時平は藤原淑子や温子ら北家嫡流出身の女性たちとも円満な関係を結んでいる。

醍醐天皇即位の翌年、昌泰二年（八九九）いよいよ時平は左大臣、道真は右大臣とされた。二人の大

臣任官は醍醐による新たな体制の始動であり、二人に大臣として醍醐天皇を支えさせるためであった。しかし、道真は三度にわたって辞表を提出している。その中で「当時の納言臣に居るもの、将相の貴種、宗室の清流」であるのに対して「臣が地は貴種に非ず、家はこれ学者、偏に太上皇往年拔群の恩により」成ったのであり、多くの先輩を抜いて天皇を支える要職になったのであるが、「人心己に従容せず、鬼敢キカン必ず涯ガイさいを加えん」（人々は私にはしたがわず、良くないことが必ず起こってしまう）と辞表の思いを述べている。「貴種」ではなく「学者」の出自であるがゆえに人に容れられないと述べていることは、道真の固有の事情である。もちろん辞表が容れられる筈がないから、道真は「将相の貴種」時平と「宗室の清流」源氏出自の公卿らの上に立って、右大臣の座にあり続けることになった。

処で、二度目の右大臣辞表を呈した一〇月、道真

は思わぬ意見書「菅右相府に捧る書」を突き付けられた。分をわきまえ、右大臣を辞することを勧めるこの意見書を道真に送ったのは、文章博士の三善清行であった。自ら記した「藤原保則伝キタイ」において、保則の言として道真を「危殆キタイの士」と称したり、時平に進言した状では道真を「悪逆の主」としていることから、道真に反感を抱いていたとされる。才能がありながら菅家の門下でないので冷遇されたことから最大派閥である菅家と、その頂点に立つ道真に厳しい見方をするようになったとされている。しかし、自らの出自に照らして右大臣任官が分が過ぎたものであることを十分すぎる程認識している道真にとって、だからこそ辞表を出していても、それが認められない道真にとってこの清行の意見書にどのような思いを以て目を通したのだろうか。

一月には、清行は「予め革命を論じるの議」を朝廷に呈した。そこでは「明年二月、帝王革命の期、

君臣剋賊の運に当たるとし、それは「漢国(中国)」と「本国(日本)」の歴史に照らして間違いない。

「そこで伏して望むことは『近侍』の中に『邪計』・

『異図』を持つ人物がいるが、天皇は『近侍』には『青眼(親しい人に対する愛する目つき)』を、『群臣』には『赤心(真心)』を推し、君臣一体となって難を超克すべきである」と、清行は天皇へ呈言したのである。従って、道真にある反感を持っていたことはたしかでも、これで直ちに清行に道真を排斥する思いが有ったと云うのは、難しいように思われる。

併し、それから二ヶ月ほど後、道真は朝廷を追われることになったのである。昌泰四年(九〇一)正月二五日、内裏の諸陣が嚴戒される中、紫宸殿に出御した醍醐天皇によって、右大臣菅原道真をダサイノゴンノチ太宰権師に左遷すると詔が発せられた。菅原道真が「敗者」とされた瞬間である。わずか二〇日ほど前の正月七日、道真は正三位から従二位に昇格され

たばかりであり、道真自身にとっても、多くの貴族・官人にとっても、それは突然の事であった。宇多法皇はすぐ内裏に駆けつけたが門を守る陣官に阻まれ、そこに草座を敷いて終日待機したが、なすすべもなく退去せざるを得なかった。二七日には道真の子息もそれぞれが左遷され、道真は太宰権師とはいえ大宰府の行政には関与させない事、任中の給与も従者も与えられないこと、さらに通行してゆく国々による食事や馬の用意も禁じることが命じられた。道真が都を離れたのは、二月一日であった。

すでに古い時代からその発令は藤原時平の讒言によるものとされてきた。これを『昌泰の変』というが、道真はその後二年余りを大宰府で過ごし、生前には許されることなく、延喜三年(九〇三)二月二五日、五九歳の生涯を終えた。

『昌泰の変』は摂関政治成立過程において、藤原氏における他氏排斥事件の一つとされている。とすれ

ば、菅原道真を「敗者」としたのは、摂関政治そのものであったと云う理解が成り立つ。時代とは云え、誠に惜しい人物を亡くしたものである。

醍醐天皇は天皇として立派な成果を残しているが、道真左遷の件ではその当時の人々は、後代の者が考えている以上に大きくとらえ直している。その根拠の一つは道真怨霊の祟りについてである。それが初めて語られたのは延喜二三年（九二三）三月醍醐天皇の皇太子保明親王が没した時である。

『日本紀略』には、「……世を挙げて云う、菅師霊魂宿分為すところなり」と記されている。そして、四月二〇日、次のような詔が出された。「……多歳を積むと云えども何ぞ相忘るることあらんや。故に本職（右大臣）を贈り、兼ねて一階を増す。ここに旧意を示し以て霊魂を慰めん。宜しく昌泰四年正月二五日宣命を棄て、これを焼却すべし」（『政事要略』卷二二）。

これによって、道真の左遷はなかったこととされた。没後二〇年を経て、菅原道真はやつと名譽回復を果たしたのである。天皇に良く仕え、今以って「学問の神様」とされている菅原道真の生涯は、真に厳しい辛いものであった。



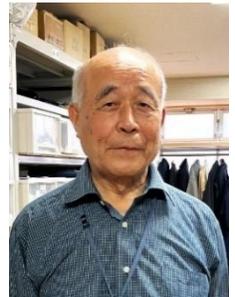


夏の表参道

大和撫子

女性教育のパイオニア

津田梅子



神奈川 芹澤和彦

明治新政府が誕生して間もない一八七一年（明治四年）七月十四日、在京中の藩知事（旧藩主）達は皇居に呼ばれた。そこで三条実美はびっくり仰天の明治天皇の詔書を読み上げた。その趣旨は「国家万民の安全を保ち万国に対峙するために、藩を廃し県とする」というものであった。

藩を無くすことで、年貢と兵は全て中央政府の管

轄となる。しかし、武士の多くは無職となる。他国でこんなことをやったら、内乱や暴動は必至である。ところが、大きな混乱や反発は起こらなかった。当時の武士たちは自国の危機を十分知っていたからだろう。世界史上例をみない奇跡を呼んだのは、自らが犠牲となって強力な国をつくらねば、日本は生き延びていけないということを十分認識していたからだろう。

ところが、その四か月後、新政府は世界でも例のないことを敢行する。「岩倉使節団」である。岩倉具視を団長に、副使に大久保利通、伊藤博文など、各省理事随員、留学生を含めて一〇七名の特大使節団である。この中に五名の少女留学生がいた。その五名とは、

東京府士族 上田俊 娘 梯子 十七歳

東京府土族 吉益正雄 娘 亮子 十五歳

青森県土族 山川与十郎 妹 捨松 十二歳

静岡県土族 永井久太郎 養女 繁子 九歳

東京府土族 津田仙 娘 梅子 七歳

であるが、年齢は文献に記述の差や、満年齢や数え年が混じってしまい、梅子についても六歳、七歳、八歳と三つの年齢が見られる。

それでは、この五人の留学生はどのようにして選ばれたのでしょうか。これは北海道開拓使が「日本の近代化の為には女性も国際的な教養を持つべきだ」ということで募集したものです。明治二年北海道の開拓にあたる官庁がつけられたが、その次官に黒田清隆が選ばれた。黒田はアメリカで開拓の視察に行ったときワシントンDCで公使であった森有礼（後の文部大臣）に会った。そこで二人は「人間を育て

るには、母親の役割が重要である」との意見を共有した。

帰国後の黒田は岩倉使節団の派遣のことを知り、女史留学生を含めるべきだと具申した。政府はこれに応じ志願者を募集した。だが応募は皆無であった。明治初期に、我が娘を外国に留学させる親などいないのは当然である。そこで政府は、海外経験のある親や兄弟をもつ女子を可能性のある候補者とした。梅子の父の津田仙は、一八六七年の遣米使節団の通訳として同行しているし、永井繁子の父鷹之助と兄の孝は、一八六三年の遣欧使節でフランスに同行している。

また、ここで注意したいのは、年長の上田が外務官僚の娘で、残りの四名は旧幕府（賊軍）側の藩士の娘である、ということですが。これは憶測ですが、

賊軍藩士の娘であれば、胸を張って生きていくのは難しい。嫁入り先でもそれゆえの苦しみもあるのではないか、捨松の兄の山川健次郎（東大総長）のように、本人の実力と努力で不利な人生をひっくり返すことが出来たように、アメリカに行った方が新しい世界が開かれるのではないか、などと親や兄弟は思っていたのではないか。

五人の少女は渡航前、皇后に謁見し、「お沙汰書」を手渡された。それには、

其方女子にして洋学修行の志、誠に神妙のこと
に候。追々女学御取建の儀に候へば、成業帰朝
の上は婦女の規範とも相成候様心掛け、日夜勉

勵可致事

と、書かれていた。梅子は、この沙汰により帰国後は日本女性の教育に尽くす使命を与えられたと解

釈したようである。

五人を乗せた「アメリカ号」が、サンフランシスコに着くと、熱狂的な歓迎を受けました。「絵のように美しいサムライの娘たち」として、どこへ行っても大人気でした。日本を出航した時は全員着物を着ていたが、シカゴで初めて五人が洋服の姿になった時の写真を見ると実にチャーミングである。特に山川捨松の膝の上に座っている梅子は、お人形のように可愛い姿である。しかし、現地で五人の面倒を見る外交官としてワシントンにいた森有礼は、最年少の梅子を見て「こんな幼い少女をアメリカに送り込んでどうするのか」と驚いたそうである。

岩倉大使一行と別れた五名は、公使の森有礼の準備した家に住むことにした。しかし、五名が何時も一緒にいると日本語ばかり話して英語が上手くなら

ないと別々の家に寄宿することにした。梅子はワシントンDCの近郊ジョージタウンに住んでいるチャールズ・ランマン家に吉益亮子と一緒に引き取られました。

しかし、亮子は眼病に罹り、同じく体調を崩した上田梯子と共に一年足らずで帰国してしまったので梅子は本当の一人ぼっちで過ごすことになる。ランマン家に梅子を引き受ける契約は一年であったが、結局同家で十年間も過ごすことになる。

ランマンは、日本大使館で書記官を務めていたので、森とは顔見知りである。梅子はアメリカの中産階級に預けられ育てられたのである。梅子は早速コレシエト・インステイテュートという、小さな学校に相当する私塾に通うことになった。一学年が十名程度、全校でも百名程度の規模である。ここで六年

間を学び卒業するとアーチャー・インステイテュートというハイスクールレベルの女子校に入学する。

ここでは、英語のほかフランス語、ラテン語、地理学、生理学、歴史、代数、博物学など十七項目を履修している。この中で特に語学、数学、物理学の成績が良かった。

梅子が学校に通うようになってしばらくすると、ランマン夫人から、梅子の母親初子に手紙が届く。

それには、

梅子は学校に通うようになったが、学友たちと仲良く学んでいるので安心してください。

梅子は学校では特別に勉強がよくできているので自分たちは感心しています。

勉学にたいへん熱心で、学問ばかりする生活にならないよう夫婦で抑制するほどです。

英語の上達はびっくりするほどで、会話だけでなく書くことも日本語より英語の方が上手になっっています。

などと、梅子の素晴らしさが書かれていた。この英語の手紙も夫の津田仙が通訳をしていたから、初子も理解できたのでしょう。ここで心配な事は、英語は得意になっても日本語の方が心配になっってくることです。山川捨松の場合は、日本語を忘れては困るからと、当時エール大学のシェフィールド理学校に在学していた次兄の健次郎が毎週捨松を訪ねて来て練習をしていたようです。

一八八一年（明治十四年）、永井繁子はヴァッサー女子大学の三年制芸術過程を終えて、予定通り十年間の留学を終了し十月に帰国した。梅子と捨松は、それぞれの学校を卒業するまで、一年間の留学延長

の許可をもらい兩人共留学を完結できた。一八八二年十月三十一日、梅子は捨松と一緒にサンフランシスコを出国し十一月二十一日に横浜港に着いた。梅子は十八歳、捨松二十三歳となっていた。三人の留学生のうち、最年少の梅子だけが大学教育を受けなかったが、そのことが梅子の後の生き方に大いに関係してくる。

喜んで帰国した梅子は、教師になることを希望していた。しかし、政府の梅子たちの受け入れ態勢は何も無く、男子留學生の出世街道ひた走りとは全然異なっていた。捨松にも、日本に女学校を創る大きな夢があり、当面は教師として働く決意をしたのだが、いくら十分な知識があっても日本語で教えることができないことに気が付きます。そんな複雑な心境にいる時、会津藩の仇だからと反対する家族を説

得した西郷従道の従兄の大山巖と結婚する。帰国して、たった一年が過ぎたばかりの時でした。将来の生き方を梅子と語り、二人共教育界で活躍しようとしたのに、あまりにも早い変化に捨松もちよつと氣まづい思いをしています。しかし、捨松の結婚相手の大山巖が日本陸軍の建設に当たった高官であり、後には内大臣にまでなった実力者であったことが幸いする。捨松も梅子も後の教育の理想に向かつていくうえで大いに助けとなったからである。

梅子には、捨松と同様に言葉の悩みがあった。英語の会話力は、欧米に留学経験のある人たちの中では群を抜いていた。しかし、日本語の読み書きは十分できなかった。

帰国後間もないある日のこと、キリスト教会の帰りの人力車の中で、梅子は忘れ物をしたことに気が

ついた。それを取りにもどりたいのだが、そのことをとっさに日本語で表現できない。困りきっている処へ、日本語に堪能なアメリカ人の知人とたまたま出会ったので、通訳してもらって助けられたことがあった、という。そんなことから、私塾の桃夭女塾の下田歌子に国語と書道を習い、梅子は同塾で女生徒に英語を教えた。また岩倉使節団で会ったことのある伊藤博文と再会し、伊藤家に住み込みで夫人と娘の英語の家庭教師となり、夫人と外国人との会話の通訳をして、公的な職業が決まるまでを過ごした。

明治十八年、学習院の女子部が独立し華族女学校が開校した。梅子は同校の英語教師として採用された。帰国から三年も経っていて、二十一歳となっていた。採用に当たっては、捨松や伊藤博文の支援が

あったのは当然であろう。華族とは、旧大名家、旧公家、国家功労者などの身分階級でありますから、華族女学校には良家の女性ばかりが集まっていたのです。ですから、生徒の性格はしとやかで優しい人が多かった。しかし、それほど学業には熱心さはなく、自主性にも乏しいので、梅子はいらだちと物足りなさを感じていた。たぶんこの頃から学問好ききな授業に熱心な生徒の集まる学校を創りたいと思ったのではないか。

生徒には不満であったが、華族女学校の英語教師として来日していたアリス・ベーコンと友達になったことは大きな収穫であった。ベーコン家は、最初に捨松が引き取られたところで、そこにはアリスと、捨松より年上の娘がいて、毎日二人で遊んだり、学習するようになった。そのためか後にヴァッサー

大学への進学も一緒でありました。その同級生である彼女に華族女学校に英語を教えに来ないか、と誘ったのは、捨松であり、梅子でありました。アリスと梅子は外交官の留守宅を借りて、二人の共同生活を始める。両者共に独身であり、華族女学校の英語教師でもあって、日本の文化を理解するには、これほどいい条件はないであろう。

アリスは、『華族女学校教師の見た明治日本の内側』という著述があるほどの才媛である。梅子とアリスの共同生活は、いろいろ刺激しあい二人共に成長していったことは確かである。こんな中で梅子は自分が大学教育を受けていないことを強く認識したのではななかりうか。梅子は、そのことをアリスに相談すると彼女も梅子に大学進学を勧めるのであった。それと華族女学校のあり方に疑問を持ち、自

分の理想とする学校を創るには、大学での専門の学問をしなければならぬと強く思ったのではないか。自分が思ったら、それに対し積極的に行動に出る、という当時の明治女性とは全然違う生き方の梅子は、大学進学に向かって突き進む。ここで大変幸運なことに恵まれる。梅子の豊富な人脈もそうだが、彼女の特別な才能と人柄が、そうさせたように思われる。

明治二十二年四月、華族女学校の校長西村茂樹宛に辞職願を出したが、学習院長の大鳥圭介（元幕臣で五稜郭で降伏するまで闘いぬいた。出獄後は清国公使や元老院議員を歴任）等の計らいで、帰国後も華族女学校で勤務するという条件で、在官のままでの留学が認められた。また、受け入れ先のプリンマー大学から学費の免除と寄宿舎を準備するという好条件が提示された。

梅子の再留学先のプリンマー大学はジョセフ・テラーという実業界で大成功した医者の子の遺言「女子の高等教育機関を設立せよ」を受けて設立された。

アメリカ東部の名門校の一つであり、高水準の学問を女性にも期待するという、当時としては極めてユニークな学校であった。初めて女性としてハーバード大学総長となったハンナ・グレイは、この卒業生である。

ここで梅子は英語教育法を学んだのは言うまでもないが、驚くことは、生物学に強い関心を持ったことである。生物学の指導者は、後にノーベル賞を受けたモーガン教授でありました。梅子に与えられた課題は、赤ガエルの卵を使って、その卵割の様子を観察するものであった。彼女がモーガンに提出した研究は同大学でも注目されるほど秀逸であった。梅

子が帰国して二年後、モーガンとの共著論文「カエルの卵の定位」として、イギリスの科学雑誌に載ることになる。外国の学術誌に最初に科学論文を発表した日本女性となったのだ。

ここで、梅子は相当悩んだのではないかと思われる。英語教育をとるか学者の道を選ぶか、どちらにするか。学者の道を進むには、さらに大学院、そして当時では不可能に近い博士号取得という困難がある。結局、長い間の夢、英語学校設立への道を進むことにした。そのことで学部長のトマスに「梅子の恩知らず」と、ののしられたという。

帰国後、梅子はしばらくの間は華族女学校や女子師範学校などで教えますが、後にそれらを辞し、いよいよ女子高等教育への高い理想を掲げ、念願の学校の創設に突き進んでいった。私塾の開校願いは直

ぐに認可され明治三十三年九月十四日に開校となった。麹町に手頃な住宅を借りての出発であった。そこは梅子とアリス・ベーコンが住む家でもあった。

この小さな学舎は、新渡戸稲造や捨松など多くの支援者により、だんだんと学校らしく整っていく。特に捨松の協力は、塾の顧問、理事、同窓会の会長を努めるなど大きな支えとなった。

ここでの梅子の授業や教育方針は、どんなものだったのでしょうか。ある生徒は梅子に英作文を習い、先生はあいまいなこと、ぐずぐずしたことがお嫌いで、英作文でも抽象的な論議だけではだめで、具体的な主張が必要でした。たとえばちょうど日露戦争中（明治三十七年）でしたので、この時代どうすれば国家の役に立てるか、について論じた時でも「節約が大切で食事あまり贅沢してはならない」と書

いたところ、先生は「日本人は栄養の取り方少ないのに、節約するというだけではだめで、肉を止めて代わりに安くて栄養のある豆腐を食べると良い」というように具体的に例をあげなさい。というように指摘されたことを述懐しています。

教育方針については、「女性の教育と向上なくしては日本の真の発展は有り得ない」というのが大前提で、さらに具体的には塾開校式の祝辞に、はっきりと述べられています。

英語を専門に研究して、英語の専門家になろうと骨折るにつけても、完全な婦人になるに必要な他の事柄をおろそかにしてはなりません。全ての面で完全な婦人になるよう心掛けねばなりません。

もう少し分かりやすく知るために明治三十九年発

行の『女子遊学便覧』をみると、

「本塾に学ぶ者はよほど頭脳の健全な学識の豊富な人でなければ到底他の塾生と歩調を一にして進むことが出来ない」とある。

塾は段々と発展したが、いよいよこれからという時に梅子は脳溢血に罹り入院を繰り返した。

晩年の梅子は、自宅は北品川にあったが、夏は鎌倉の別荘で、読書や編み物が日課となった。そして、十年間の闘病後、昭和四年八月十六日に六十四歳で逝去した。問題をいくつも起こして梅子を悩ました山川菊栄（社会主義運動の女性理論家として活躍）は、追悼文に「仕事の為に完全に一生を捧げ尽くし、与えられた使命ゆえに、勇敢に、悔いることなく孤独の生涯を選んだ強き女性」と書いている。

(参考書)

* 『世界に誇る日本人』 廣池幹堂 モラロ

ジー研究所

* 『津田梅子』 古川安 東京大学出版

* 『津田梅子』 橋本俊詔 平凡社

* 『明治女が教えてくれたプライドのある生き方』

石川真理子 講談社



津田梅

ウィキペディア・フ

羽曳野物語 (一)

柳田 節

(この物語は、個人の想像です)

(四回連載の予定)

- 序章 日本再建を日本発祥の地から
- 第二章 来目皇子(くめのみこ)
- 第三章 天智天皇の想い
- 第四章 「シラス」の思想が世界を救う

序章 日本再建を日本発祥の地から

○古き教えがいま日本を救う

現代は、人は頭や知恵を使って行動するのが当たり前ですが、人類が始まった頃は、どうだったでしょうか。おそらく、人は自らの直感を頼りに、自分の「思い」から行動したのではないのでしょうか。

近代に入って西洋では、人は理性を中心にして物事を考えるようになり、現代に至っています。やはり、頭を使っていることに変わりはありません。

しかし、いま世界の現実を見ますと、人類としてうまく行っていると言えるでしょうか。自然環境は破壊され、戦争は繰り返し行われています。いまの世の中がこれでいい、と言えるのでしょうか。

いまから二十数年前、西暦二〇〇〇年を迎えたとき、つまり、二十世紀が終わったときのことですが、人類は二つの問題を抱えていると言われました。一

つは、自然環境の破壊、もう一つは人同士の争い、つまり、なくならない戦争でした。人間は未だに幸福に成れてはいません。

これらは、人間が「己の欲」から自然界とうまく調和できず、「己の我」から人と調和できてないことを意味しています。これが、人類としてうまく行っていると言えるでしょうか。

昔、神代の頃の日本は、知恵や心ではなく、自分のうちにある本当の自分「みたま」を中心として行動していました。その時代といえ、人は自然と神と同居生活をして幸せに暮らしていた時代であり、人はみな自分の中に、神性、ないしは靈性を持っていると言われています。

一度、その頃の元の日本人の生き方に還ることが大切だと言われています。その上で、この生き方を現代に甦らせること、それがいまの日本を救うことになるはず。そういうことを、日本の歴史がい

つも示唆しています。

○国難のとき一度元へ還る日本の歴史

例えば古代。「白村江（はくすきのえ）の戦い」で日本は大敗しました。その後、当時の先進国、唐（中国）に国の存亡を脅かされました。そして、日本の国づくりが始められるのです。一度元の日本に還って、古事記・日本書記を編纂し、成ってきた皇室中心の国柄を内外に示しました。また、「和をもって尊しとなす」など、日本古来の国民性に遡ってそれを核として、当時、最新だった律令国家を建設しました。国防としては防人、水城を設置しました。この頃初めて、天皇の名称や日本の国名も意識して使われるようになりました。

次の国難と言えば、明治時代。欧米先進国の脅威に対抗できる国づくりが始まりました。古来から続く皇室中心の国柄に、一度還るため、『大政奉還』を

行い、そこに西洋先進国の制度を採り入れ、近代国家体制を整えました。明治憲法も、古事記の国譲りに繋がる昔の日本独自の考え方「シラス」の概念を取り入れています。

その次は、昭和の大戦でした。敗戦によって西洋の民主主義や自由平等主義を受け入れることになりましたが、昭和天皇の必死のご努力の中、焼け跡の中にただ一つ残ったのは、古来の日本人の民族性あるいは、日本人のアイデンティティでした。「国体の護持」がなされたということには、そういう意味が含まれていると思います。

日本の歴史を振り返れば、日本が危機に陥ったとき、必ず一度、昔の日本に還っていること、そして、脱皮するように新しい日本に生まれ変わっていることが、よく分かります。これは日本の持つ特性です。

海外の国家の脅威はそのようなことでしたが、外来文化についても同じことが言えます。芥川龍之介

は、『神々の微笑』という短編で「漢字」や「仏教」という強大な外来文化のことに触れています。「仏教」と「漢字」という外来文化に呑み込まれそうになったとき、日本人は、もつと強靱な日本文化で負けなかったと指摘しています。それを日本文化の「造り変える力」と呼んでいます。いずれも、一度、元の日本に還ってから独自文化に生まれ変わっているというのです。おそらく、古い日本の国は底力があるのでしょう。元の日本に還れば、必ず何かしら宝物が出てくるのです。

○現代に灯を点す古来の教え

戦後の日本は、一口に言って、西洋の新しい文化は拡がりましたが、古くからの日本の文化や伝統の良さが消えてしまいました。

草垣女史は、そんな戦後日本の状況の中で、まず、元の日本に還ることを言われたわけです。

元の日本とは、どういふものでしょうか？ 神代

の頃、皆が「みたまに沿った生き方」をしていた、それが元の元の日本人の生き方だと言われています。

そういう生き方によって、日本人が日本人本来の自分を取り戻すことができるのではないか、そういうことを言われたのだと思います。

このことは、自分を見失ってしまった現代人の内面に火を灯すことであり、そして、このことは日本の再建（世直り国替え）につながることでした。日本の国を大切にしていくことを説いています。

いまのような混沌とした時代に生きる私たちにとって、それは、闇の世に火を灯すことであり、また皆が喜び合えることです。古い教えの中にある日本人の在り方を現代に甦らせる、そういう内容です。私たちが日本人として、これからの時代をどのように生きていきたいか、その方向性を示唆するものでもあります。目に見えるものしか信じられない現代人

に警鐘を鳴らすものでありました。

この「あたらしい道」の現代的意義を挙げるならば、「日本の再建」であると私は思います。

○日本人らしさを見失った現代日本

敗戦後まもない昭和二十七年に、草垣女史のお肚から聞こえてきたのは「国が危ない、国が危ない」という言葉でした。このままでは日本は危ない。それはおそらく国単位で成り立ついまの国際社会の時代を背景にした、国体に関わる危うさであったのだと思われまます。また、単純に人々の思いの危うさであったのかもしれない。

明治維新という日本の近代化と昭和の敗戦による欧米文化の流入という、欧米先進国からの二度の「西洋化」（近代化とは言い難い）の波を受け、日本人は自分を見失いかけてました。その基には、古い歴史を積重ねてきた縄文時代に遡る「豊かな人間らしさ」

を持つ、元の日本人の歴史があつたはずです。

このままではこの国は、国としての存在まで危うい。だから、人々に元の日本人の良さを思い出し、もらい、本来の自分を取り戻して欲しいと現代人の内面に働きかけ、一人ひとりのお肚に火を灯そうとされたのではないかと思ひます。

○日本を支える千人を育てる

女史はごく普通の明治の女性でした。娘として、妻として、母として生き、その間、日本を支える要人千人を育てようと思ひました。いつも「人を育てること」に没頭されました。幼稚園では園児を育て、我が家では引き取った幼子を我が子として育て、その後、羽曳野では、日本を再建する「世直り国替え」を目指して、日本を支える誠の男千人を育成されました。

草垣女史は事新たなことを言われたわけではなく、

神代の頃からのみたま通りに生きること、元の日本に還ることを提唱され、また、いつも「古き良き日本のこと」（日本の理）を口伝えされました。

○日本再建を日本発祥の地から

草垣女史は、東京を離れて関西を転居された後、たどり着いたのは、古代大和朝廷（ヤマト王権）の都の地でした。この羽曳野は陰で天皇を支えた常備軍団一族の本拠地でもあつたとも言われております。この軍団に縁のある者がおそらくは、道友としてここに集まってきたのだと、私は思っています。

そして、その軍団は聖徳太子の弟君、若くして亡くなつた来目皇子にご縁のある集団であつたのかも知れません。その来目皇子（くめのみこ）の陵墓を囲むようにしてある、このあたらしい道の土地処は、大和朝廷、日本国発祥の地でもあります。この地で草垣女史は、古来の日本の教えに拠って古き良き日

本の国を再び取り戻そうとされました。千人の誠の人を育てることに専念されたのです。その女史の教え導いた最も古い教えの道が、あたらしい道であります。

遠い昔、日本の国が初めて造られたとき、大和朝廷は、全国に向けてこの地（大和の国と共に）から発信しました。

同様に、女史は日本の再建を、この地から全国に発信されたのです。

○あたらしい道の教えから

元の日本に還る

「この道によってどうしても元の有難い日本に（還る）」

「日本を元に還るのが天の理」

「元の日本に建て直ってみろくの世に」

かむながら

「あたらしいくこの道は、最も古い上代（神代）の理、これを言います」

「この道の理、遠い昔、神代の頃に、人間というものはこうありえ、こうあろうえ、そういうふうなことごとに教えてある。それが道」

「まあ、時代の変遷。今の世に『かむながら』を…。
なんとまあ矛盾です…」

「偉い人ではなく 有難い人になる道」

「立派な人になるのではなく、世のため人のためになる、有難い人になる。」

「根の教え」

「大事なものは、幹や枝葉でなく土の中で支えている見えない根。その根を肥やす道。」

「偶然はない 全ては必然」

―成ってきたことに意味がある。

―人のせいにせず、すべてを自分のせいにする生き方。

「成ってきたことに訳がある」

―古くから日本人は「成って来たこと」を自然（ナチュラル）に受け止める民族（神と大自然と共に暮らした世界観）

―古事記の冒頭「天地初発の時、高天原に成りませる神の名は天御中主神…」の言葉がある。

（つづく）



山中湖付近にて
久野尚武さん撮影



編集後記

新年度の新たな企画

- 年度も改まり、季刊誌の内容も多少、模様替えがありました。
- 日本らしさを「日本の国柄」、日本人らしさを「日本の人柄」の二本立てになります。
- 「座談会」が始まり、また新たに女性のためのコーナーとして「大和撫子」が掲載されます。
- たまには、昔の月刊誌からのリバイバルもあり、また寄稿文も順次、掲載予定です。
- 息抜きには、「羽曳野物語」が連載されます。道友のルーツ？古代ロマンの世界？です。

(修正) 前の誤り

○前号の538号で、誤りがありました。「福子伝説」の文中、福

島大元教授、飯田文彦氏(誤)のお名前は、正しくは飯田史彦(正)氏でした。お詫びして訂正させていただきます。

今月の季刊誌

「座談会」

○今回の座談会は、平成に繋がられた三人方のお話です。ご面接があった方もなかった方も、いずれも地元に戻ると名士の方ばかりです。

○どのような動機から繋がられたのでしょうか？ それぞれ、ご先祖さんからの要請があつて、来られたように見えます。

○林さんは、お父さんの国旗を揚げる姿を見て国を思い、それが切っ掛けとなりました。

○金内さんは、正に、お父さんの代わりに金内家の因縁果たしをし

ようとお行に來られました。

○竹田さんは、義父がよく口にされていた「因縁納消」の言葉を思い出し、大阪の地で因縁納消をしたいと思われました。

○三者三様ですが、実は、先祖さん共々、一族の因縁果たしをさせてもらうことになりました。そして、それぞれ、お父さんに連れてきてもらっています。

○この道は、早く因縁果たしをして、きれいなお肚になって、道のため、国のため、尽くすようになっている順序のことが、よく分かります。

「日本のあじ」

○八木さんの「日本のあじ」の意訳は実に名訳です。外国人にあたり道をするように説明されるのか、私も強い関心が湧きました。そして、聞いてみて感心もいたし

ました。

頂けましたら幸いです。

「菅原道真」・「憧れるのをやめましよう」・「万世一系の皇統と日本人の本来性」・大和撫子「津田梅子」

○「菅原道真」のドロドロした人間模様は驚きました。

○大谷翔平氏から中村天風氏まで登場する「憧れるのをやめましよう」、日本人の本来性から見た日本の歴史の「万世一系の皇統と日本人の本来性」も、興味深くお読みいただけるのではないのでしょうか。

○女性向き欄として、「大和撫子」が新登場。新五千円札の顔となる「津田梅子」伝も波瀾万丈です。

女史英学塾（現津田塾大学）を創設した女子教育の先駆者と言われていると思います。

○今年の夏も、季刊誌でお楽しみ

季刊誌「あたらしい道」の購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先…

あたらしい道 本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和6年夏号

令和 6年 6月 8日発行 (第539号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道

大阪府羽曳野市はびきの3-3-18

〒583-0872 ☎0729(56)7971

印刷所 オリムピア印刷株式会社

大阪市西区江戸堀 2-1-13 6F

〒550-0002 ☎06-6448-8508